
彼女と恋と勉強方法

ナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と恋と勉強方法

【Nコード】

N8457X

【作者名】

ナル

【あらすじ】

山多摩高校に通う成績優秀な生徒、赤久奈奈あかくんなのか乃香はその日学校に置き忘れてしまった本を取るために放課後の学校に向かう。そして軽いノリで図書室に向かった。そこには山多摩高校で一番成績が悪い生徒、雲取くもとり亘わたるが勉強していた。あまりの勉強の効率の悪さに痺れを切らした赤久奈は「私が勉強教えてあげる」と言ってしまう。そこから赤久奈と雲取の合同勉強、そしてその他の生徒たちをも巻き込んだ青春が始まった……。

プロローグ 『全ての始まり』 三人称視点

「人生って簡単ね」

少し豪華な雰囲気を漂わせる部屋の一室で長い黒髪の少女 赤久奈奈乃香は呟いた。

赤久奈の右手には少ししわくちやになってしまったテストの解答用紙が握られている。どれも高得点だ。

今日は5月20日。赤久奈が通う山多摩高校では第一回定期考査が終了して一週間が経った日だ。高校の掲示板には定期考査の順位が張り出されている。
結果は一番ではなかったにしろ赤久奈の順位は上から数えたほうが早かった。

「はあ、勉強ってつまらないわねー」

赤久奈は溜息を吐き出しながら天井を見上げた。この場合の『つまらない』は「テストが面倒臭い」という意味ではなく「テストが簡単すぎる」という意味である。

赤久奈は勉強をしたことが無かった。

赤久奈の頭は要領良く作られているのか、授業で習ったことを忘れるということがなかった。もともと、赤久奈からしてみれば「どうして一度聞いたことを忘れるのだろうか？」と思っているだろう。

「まあいいわ。暇だし読書でもしようかしら」

そう呟きながら赤久奈は鞆の中から本を取り出そうとした。そこで「あれ？」と間抜けな声を出していた。

「……本がない」

赤久奈は何かの間違いだろうと思いつながら鞆の中身をひっくり返した。教科書や文房具やらが床に散らばるが、それでも目的の本が出てくることはなかった。

「はあ……学校に忘れたのかな……？」

赤久奈は頭を掻きながら本の在り処を思い出していた。

「面倒臭いけどまあいいか……」

そう呟きながら赤久奈は部屋着を脱いで制服に着替えなおした。本来の赤久奈なら本を忘れたとしても「明日でいいか」と言っているところだが、なぜか今日はたまたま本を取りに行こうと思っていた。

「うし」

山多摩高校の制服に着替えた赤久奈は小さく気合を入れてから家を出て行った。

山多摩高校の制服は素朴なもので、全校生徒が黒い地味なブレザーに身を包んでいる。校舎もその素朴さに合わせているのか、それとも合ってしまったのか、少し薄汚れている箇所が多く見れる。そんな少し薄汚れた校舎の二年生の下駄箱には赤久奈がいた。

現在時刻は5時。この時間帯に存在する生徒は部活動に励んでいる。そのためか遠くから吹奏楽部のラッパの音が微かに聴こえてくる。

そして赤久奈は自分が所属する二年C組に辿り着き、自分の席から目的の本を取り出した。

「よし、任務完了」

赤久奈は少し嬉しそうな顔をしながら呟いた。後は来た道を戻るだけだ。

「……………ん？」

いざ帰ろう、と思ったときに赤久奈はつい窓の外を眺めた。山多摩学園の校舎の作りは上から見ると『ロ』の字に見えるため、窓から外を眺めると向こう側の校舎を見ることが出来る。ちょうど赤久奈が所属する二年C組の校舎の向こう側は図書室となっている。別にそのこと自体は赤久奈も知っているからたいした問題ではないだが、

「誰がいる？」

赤久奈は眼を凝らしながら図書室を見た。やはりそこには赤久奈が思ったとおり誰かがいるようだった。光の反射とかそういう都合のため『誰かがいる』としか認識できずそれが男子生徒なのかそれとも女子生徒なのかまでは確認することが出来ない。

「こんな時間に珍しい……………」

赤久奈は図書室にいる誰かに向かって小さく呟いた。

赤久奈の言うとおり、図書室に人がいるということは極めて珍しいことだった。

この山多摩高校の図書室は名前の割には置いてある本が非常に少ない。その本の数は隣にある資料室のほうが多いのではないかと思わせるぐらいの少なさだった。

そのため大抵の生徒はこの図書室ではなく高校のすぐ近くに設けられた図書館を利用するものが多い。

「ふん……」

赤久奈は物珍しそうに図書室にいる誰かを見ている。

そしてどういうわけか、赤久奈は来た道を戻らずに図書室に向かって歩き始めた。

そのときの赤久奈はただの好奇心から図書室に向かっていた。ただたんに「面白そうだから」とか「暇つぶしのために」とかそんな軽いノリで図書室に向かっていた。

それが後々に、その図書館にいる誰かに恋することも露知らずに……。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

放課後の図書室で俺こと雲取亘（くもとりわたる）は夕日に顔を照らしながら一人寂しく勉強しているのは言うまでもない。

別に俺だってわざわざ勉強したくて居残っているわけではない。これには深い理由がある。

それは単純明快、俺が馬鹿だからだ。

俺が通う山多摩高校ではついこの間第一回定期考査が行われた。

そのときに俺は迂闊にも試験範囲を間違えてしまい万全な状態で試験に挑むことが出来なかった。

その結果、高校内でも最下位という必然的ではあるが不名誉な汚名を授かってしまい、教師陣からは問題扱い。そして俺が所属する二年C組の担任の教師である長尾丸先生からは「成績が悪いから図書室で補修」と言われてしまう始末だ。

「次からは試験範囲を間違えないようにしないと、剣呑剣呑」

ちなみに俺は勉強するときは雰囲気とか何と無くとかそういうた単純な理由で伊達眼鏡を着用している。学園生活を過ごす際に伊達眼鏡は俺の体の一部と化している。いわば皮膚だね、うん。

俺は気楽にもそう考えながらペンを回した。本気を出せば満点を取れる俺だからこそ余裕を持って勉強に勤しむことができるのだ。そしてペンを止めて参考用紙の問題の答えを書いた。

「えっと……太陽系で一番高い山はエベレストっつと」

「違うわよ、オリンポス山よ」

俺が「コレが一番の答えだ!」と自信満々に言える解答を書いていると、急にその解答を否定してくる言葉が聞こえてきた。

声がしたほうを振り向いてみると、そこには綺麗な黒髪を持った女性が立っていた。

「オリンポス山はエベレストの三倍もの高さがあるのよ。地球で一番高いのはエベレストで合っているけど太陽系が含まれるならオリンポスよ」

女性は説明しながら俺の席の前に歩いて座っていった。俺は「は、はあ」と呟くことしかできなかった。

「……………」

「何やってんの？ 早く解きなさいよ」

「え？ あ、うん……………」

俺が女性を眺めていると、なぜか逆ギレしながら俺のことをキツと睨んできた。俺は慌てて数学の参考書を取り出して勉強し始めた。先ほどまでは地理を勉強していたのだが、実を言うと地理は結構得意で定期考査では赤点を取らなかったのだ。

「……………」

「……………」

今の俺の状態を言葉で表すなら『気まずい』で事足りるだろう。そう思わせるほど俺は気まずさを感じていた。勉強に励もうと頭の中では意志を固めても目の前にいる女性が何者なのかに気を囚われてしまい公式が全然思い出せない。そして数字がゲシユタルト崩壊してきた。ゲシユタルト崩壊といえば『6』と『9』という数字は間際らしくて仕方がないと思う。中学生の頃はどっちがどっちだったか判らなくなって困ったときがあった。

「……ねえ、集中してるの?」

「うん、今は『6』と『9』の違いについて追求しているところだよ。あともう少しで答えが導き出せそうだ」

「……この問いの回答には『6』や『9』は使わないわよ?」

うん、それは知ってた。なので俺はこの問いの解答に『24』と書いた。

「はい間違っているわよ」

そんな馬鹿な。

「この問いはこの公式を使って解くのよ」

目の前にいる女性は俺の教科書を開いてとある公式を指差した。
なるほど、この公式を使うのか。

「で、どうやって使うの?」

「……代入するのよ」

目の前にいる女性は半ば呆れながら説明してくれた。そのおかげで俺はこの問いの答えを無事に解くことが出来た。

「ありがとう、助かったよ」

「どういたしまして」

俺が感謝の言葉を告げると、女性はやはり呆れながら返事をした。
はて、そういえばどうして呆れているのだろうか。これを話題に聞いてみよう。

「どうして呆れてるの？」

「貴方のあまりにも酷すぎる低脳な頭に呆れているのよ」

それは実に単純明快な答えであって単刀直入な解答であり残忍残酷な返事だった。この女性はなかなかどうしてこんな悪魔みたいなことが言えるのだろうか恐ろしい。

「まあどんだけ馬鹿にされていようが助けてもらったことには感謝するよ。えっと……赤久奈（あかぐな）さん」

俺が目の前にいる女性、もとい赤久奈さんにお礼を言った。すると赤久奈さんは少し驚いた顔をしてきた。

「な、なんで私の名前を知っているのよ……？」

「その台詞を言い放つてことは少し誤解しているようだね。俺は赤久奈さんの名前“しか”知らないよ。赤久奈さんがどういった人間でどういった人物なのかは何も知らないよ」

「……なるほどね。それでも私の名前を知っている理由にはならないわね。どうして知っているの？」

「それはクラスメイトだからだよ」

俺が言うと、赤久奈さんは少し目を見開きながら考え始めた。そして思い出したかのように「あっ！」と大きな声を出した。図書室では静かにして欲しい。

「思い出した！ 貴方確か同じクラスの雲取亘でしょ！？」

「その口ぶりから察するにどうやら俺のことは覚えていなかったようだね。あと図書室では静かに」

俺が皮肉を込めた言い方をすると、赤久奈さんは「ごめんごめん」

と謝ってきた。

「えっと……雲取くんはどうしてこんなところで勉強してるの？
定期試験は終わったよね？」

「勉強が好きなんだ」

赤久奈さんがまるでお茶を濁すように取り繕ってきたので、俺は
適当に嘘をついて誤魔化した。まあ半分ぐらいは本当なので神様仏
様も許してくれるだろう。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

「定期考査が終わったのにテスト勉強しているだなんてよっぽど勉強が好きなんだね、だけど気持ちは共有できないな!。だって勉強なんてつまらないでしょ?」

勉強なんてつまらないでしょ?

赤久奈(あかぐな)さんのこの言い方は全国の勉強家で勉強好きな方々にあまりにも失礼な言い方だった。これは全国の勉強家で勉強好きな方々に罵倒されたり暴力を振るわれても文句は言えないだろう。

ただし俺は罵倒や暴力を浴びる赤久奈さんのことなんてそもそもを言うとは見たくない。だからそんな残念な事態になる前に俺がハッキリと「その言葉はあまりにも勉強に励む人々に失礼だ、言い直しを要求しよう。そして全国の勉強好きな人に謝れ!」と叱ってやらなければならないな、うん。

そして俺は言った。

「だよー。勉強なんて本当につまらないよねー。一体何が楽しくて勉強しているんだろうね」

しまった、つい本音が出てしまった。

「あれ? 今さっきまで『勉強が好きなんだ』って言ってなかったっけ?」

赤久奈さんがジト目で俺を睨んできた。
しまった、墓穴を掘ってしまった。

俺は頭の中でどうやって誤魔化そうか考え、そして途中で誤魔化

す必要性が無いということに気付いたため正直に言った。

「半分好きだけど半分嫌いってことだよ。ケースバイケースってことで理解して欲しいな」

「なんで数学の公式は覚えていなくせにそんな言葉は知ってるのよ」

「馬鹿にしないで欲しいな。こう見えても中学生の頃は成績が一番だったんだよ」

後ろから数えて一番だけど。

「ところで何時まで勉強してるの？」

「そういう赤久奈さんは何時までこの図書室にいるの？」

「雲取くんが勉強を終えるまで」

「それじゃあ俺は赤久奈さんが帰るまで勉強するよ」

「ちょ、それじゃあ私帰れないじゃない!？」

赤久奈さんはなぜか慌てながら叫んできた。大事なことなのでもう一度言うがなぜか慌てながら叫んできた。

はてさて、なんで俺は理不尽にも赤久奈さんに叫ばれる……というより怒られ(？)なければならぬのだろうか？

「赤久奈さんはどうして俺が勉強を終えるまで図書室にいるの？」

「雲取くんと一緒に帰りたいからよ」

「え？ なぜに？」

「時計見なさいよ」

俺は赤久奈さんに言われるがままに図書室に備えられている時計を眺めた。時刻は既に『18時30分』となっていた。補習の時間は既に過ぎている。

「じゃあ赤久奈さんは先に帰っててよ。俺は長尾丸先生に報告しないといけないしさ」

「だったら私も一緒に行くわよ」

「え？ いや悪いよ勉強見てもらった上に付き合わせるだなんて……それに先に帰ってればいいじゃないか」

「いいわよ、どうせ暇つぶしだし。それに私は雲取くんと一緒に帰りたいのよ」

赤久奈さんはそう言いながら机の上に置いてあった鍵を取っていった。

「ほら、早くしないと帰りが遅くなるでしょ」

赤久奈さんが鍵に着いているストラップを握りブンブン回しながら俺のことを見た。俺は「ああ、悪いな」と呟きながら図書室を出て行った。

それにしても俺と一緒に帰りたいだなんておかしいことを言う人だな、と俺は心の中で呟いた。

「長尾丸（ながおまる）先生、図書室の鍵を返しにきました」

俺は職員室に入室して早速長尾丸先生の机に向かって歩いていった。

なぜか後ろから赤久奈さんが着いてきているけど気にしたら負けだと思っただけで放っておいた。

「おー……？ ああ、鍵ね。うん。お疲れ様」

長尾丸先生は癖がついた髪をボリボリと掻きながら鍵を受け取った。

長尾丸先生は見ての通り（文字で書かれているので読者の皆様には見えないだろうが、あえてこう表現する）いい加減というか適当な人間で、整理整頓が出来ない人物である。現に長尾丸先生の机の上には子供一人分ぐらいの高さがあると思わせる本のタワーが出来上がっている。

「そういえば長尾丸先生、どうして図書室に一度も来なかったのですか？」

俺は長尾丸先生に対してもっともな疑問を尋ねた。長尾丸先生はこんないい加減な人間でも一応は教師。補習中の生徒がキツチリと勉強しているのか見回りに来ていても不思議ではない。むしろその方が普通だ。にも関わらず一度も図書室には訪れなかった。

「あー……。あ、あー……。あー……。いや、うん見回ろうとしたよ？　だけど勉強の邪魔になると悪いからあえて行かなかったんだ。先生はお前のことを信じているぞ」

長尾丸先生は天井に目線を移しながら言った。

わかった、察するに忘れていたようだこの駄目教師は。

「あれ？　赤久奈。お前どうしてこんな時間帯にここにいるんだ？」

長尾丸先生は俺の背後で立っている赤久奈さんに気がつき、質問していた。

さすがは腐っても教師。一応は生徒の心配はするようだ。それに

しても確かに俺もどうして赤久奈さんが図書室に立ち寄っていたのかは気になった。本を借りていったわけでもなかったし。

「ええっと、雲取くんの勉強に付き添っていました」

赤久奈さんは少し口ごもりながら答えた。まあ嘘ではないからどうでもいいか。

「はあ？　こんなバ……頭が弱りきった奴の面倒を見ていたのか？　それはご苦労だ」

後で殴ってやろうかこのクソ教師め！

「いえ、雲取くんはなかなか取り込みが早いですよ。この調子なら学年一位も夢ではありませんよ」

おお、ナイスフォローだ赤久奈さん。でも学年一位は無理だよゴメン。

「ふうん、まあ赤久奈がそう言うんだから半分期待しておくか。それじゃあ早く下校しなさい。親が心配するぞ」

「わかりました長尾丸先生」

俺と赤久奈さんは長尾丸先生に「さようなら」と返事をしてから職員室を出て行った。そのときにコッソリと「ジジイ教師め……」と俺は呟いたのだが数秒でバレてしまい頭に拳骨を喰らったことは言うまでもない。

第1話? 『出会い』 雲取巨視点

「それじゃ、早く帰りましょ」

「……………うん」

俺は赤久奈（あかぐな）さんの後を追いかける形で下駄箱に向かつて行った。

時刻は既に『19時00分』となっていた。

いくら五月という太陽が図々しく空に居残り続ける時期だろうと月が上がるという事象は変えられない。

つまり何が言いたいのかを簡潔に言ってしまうと辺りは既に真っ暗になり始めているということだ。

「うわー、暗いねー」

俺は少し棒読みになりがちな口調で呟いた。なぜか赤久奈さんは黙っている。というより無視された感じだ。

「勉強教えてくれた礼もあるし家まで送るよ」

「へえ、意外と律儀なのね。まあ送ってもらったためにわざと待っててあげただけだね」

赤久奈さんはまるで不思議なものを見るかのような目で眺めてきた。

失礼な、俺だって常識は持っているぞ。

それにしても赤久奈さんがなんで俺と一緒に帰りたいてって言うて

いたのか謎で仕方が無かったが、今その謎が解けたため俺の頭はスッキリした。要するに期間限定の用心棒ということらしい。

「だけど赤久奈さんの言い草だと送ってもらうことが前提だったみたいだね」

「あら？ こんな遅くにか弱い女の子一人で帰らせるつもり？」

「か弱い？ それは自分で言う言葉じゃないでしょ。それに数分間しか話してないけど赤久奈さんはどちらかと言うと傲慢な人

わかったごめんなさいもう二度と言いませんだからそのモップを下ろして」

危なかった、後もう少しで俺の頭部は下駄箱の横に放置されていたモップ（しかもかなり重そうなやつ）によって潰されてミンチにされていただろう。今日俺は『モップはちゃんと片付けないと命の危険がある』という教訓を覚えた。やったぜ、無駄な知識が増えたぜ！

「私の家は校門を出て左の道を歩くのよ」

「へえ、奇遇だね。俺の家は校門を出て右の道を歩くんだ」

「そう、それは奇遇ね」

「ああ、奇遇だ」

赤久奈さんは「奇遇奇遇」とまるで馬鹿にするかのように呟きながら。それでいてまるで当然のように校門を出て左の道を歩いていた。

その姿はまるで当然の如く悠然としており、それでいて当然の如く毅然としていた。

俺は一瞬「俺は右の道に行こうかな」と呟きながら「まあ約束してしまったものは仕方がない」と自分に対して呆れながら校門を出て左の道を歩き始めた。

「ところで雲取（くもとり）くん、ちょっと質問してもいいかしら？」

「ええ、良いでしょう。この僕、雲取亘（わたる）は貴方の質問に何でも難なく答えましょう」

「……さつき鞆の中に数学の参考書を入れているときにちらりと見ちゃったんだけど雲取くんの数学の定期考査の点数……その……貴方の出席番号と同じだったんだけど私の見間違いよね？」

赤久奈さんはまるで申し訳無さそうに、だけど探究心が醸し出ている顔で尋ねてきた。

ちなみに俺の出席番号は『17番』だ。

俺はこのとき「何で俺の出席番号知ってんだよそもそも何でテストの点数見てんだよ変態サノバビッチめ！」と自分でも意味不明だと思う罵倒をしようと思ったが、さすがに恩人にそんな失礼なことはいえないので適当に誤魔化すことに決めた。

「見間違い……だと思うよ」

「いや、あれは間違いなく17点だった」

おやまあなんてことでしよう。この人は断定してきましたよ。確信犯だね、うん。

「だけど残念なことに17点ではないよ」

「……うん、他人に悪い点数を教えたくない気持ちは分かるけどさ、悪足掻きは止めようよ」

赤久奈さんが俺のことをまるで可哀想なものを見る目で見てき始めた。だけど俺の点数が17点ではないことは真実である。なので俺は潔く真実を告げることにした。

「俺の数学の点数は17じゃなくて11だよ。1“1”」

俺は証拠品として鞆の中に入れてある数学の解答用紙を取り出した。右上にはハッキリと『11』と書いてある。

『1』と『7』は時々間違えるよね似ているし。いくら赤久奈さんでも失敗はあるから仕方が無いさ。

俺は赤久奈さんの顔を見てみた。てっきり呆れた顔でもしているのかと思っていたが、どちらかと言うとまるで残念なものを見る目で俺の数学の点数を見つめている。

「ああ、うん……仕方がないよね。むしろ一桁じゃなかったから良いよね……うん」

赤久奈さんは何か言葉を探すかのような仕草をしながら俺にフオーをしてきた。

……なんでだろう、なんか胸が凄く痛い。

も、もしかして……これが恋!?

「……………なわけないか」

「急に独り言なんて呟いてどうしたの?」

「いや、独り言じゃないよ。故意に聞こえるようにしたんだよ。

ほら、早く相槌打って」

「え? あ、えっと……そうだね?」

「はいよくできました」

赤久奈さんは「意味が分からない」と言いたげな顔でこちらの様子を伺っている。

俺に伺われても困るよ。俺だって意味わかんないんだから。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

「それじゃあさ、赤久奈（あかぐな）さんの数学の定期考査の点数は何点だったの?」

自分だけ点数を暴かれるのはなんだか不愉快な気分になる。俺は割り和我侂な人間で他人の事を知りたがる性格だ。

「私? 私は88点だよ」

赤久奈さんは何の悪びれた様子も無く淡々と答えた。

「マジかよ俺の8倍かよ……」

「んー、最後の問題がどうしても解けなかったんだよねー。いつもだったら90点は越えるんだけどなー……悔しかったなー」

赤久奈さんは本当に悔しそうな顔をしながら言った。だがしかし俺からしてみれば赤点じゃないのがとても羨ましい。

「一体どうやって赤点を取らずに済むのかなあ?」

「え? 何もしなくても80点ぐらい余裕で取れるでしょ?」

きました、本日の上から目線宣言。天才ならではのお言葉です。

「俺はね、赤久奈さんと違って馬鹿だから赤点しか取れないんだよ……」

「……確かにコレは酷いね。普通に勉強しなくてもこんな点数取らないよ普通は」

赤久奈さんは同情の目で俺のことを見てきた。

そ、そんな目で俺を見ないでくれ！ 泣けてくるじゃないか！

「だ、だけどさ！ 毎日しっかりと勉強していれば報われる日がやってくるよ！ 多分！！」

赤久奈さんは何の確証も無いことを自信満々に叫びながら言った。自信満々に言ったにも関わらず『多分』といった確証も無い言葉を使っていたが、スルーしておくことに決めた。読者様の皆様もスルーしてあげてくださいいな。

「……それにしても報われる、ねえ……」

俺は赤久奈さんに聞こえないように呟き、今度は赤久奈さんに聞こえるように淡々と言った。

「……俺さ、九九も言えないんだよ」

そして赤久奈さんの顔が分かりやすく固まった。

「じよ、冗談よね？」

「いや、本当です」

「……本当に？」

「本当です」

お互いにまるで誤魔化すかのように「あっはっは」と笑った。そして次の瞬間に真顔になった。いや、真顔にならざるを得なかったと言ったほうが正しいかもしれない。

「それでは問題を出します」

「望むところだ」

「…… 6×7 は？」

「40」

「…… 2×8 は？」

「19」

「…… $8 + 8$ は？」

「64」

「なんで足算も出来ないのよっ!？」

赤久奈さんが急に怒鳴り始めた。

「で？ 全問正解だった？」

「全問不正解よ！ 小学校からやり直せ！」

……さすがに今の言葉はちょっと傷ついた。

「どうすんのよ明日物理の小テストがあるのにこんなじゃ0点に決まってるわよ！」

赤久奈さんが俺にとっては不吉なことを言ってきた。

そう、明日は物理の小テストがあるのだ。

山多摩（やまたま）高校の物理の小テストは計算問題が多く出題されるのだが、俺は計算が出来ないどころか公式すら覚えていないという絶望的な状況に陥っている。

だがしかし、俺はそんなことに備えて今日の放課後の補習中に“ある物”を作っていたのだ。

「ふっふっふ、安心してくれたまえよ赤久奈さん。俺にはコレがある」

俺はポケットの中に忍ばせておいた鉛筆を取り出し赤久奈さんに見せた。その鉛筆を見た赤久奈さんは『？』が見えるんじゃないかと思えるぐらい疑問的な顔をしていた。

まあそんな反応をしても仕方がないだろう。普通に見たらどこにでも売っているごく平凡な鉛筆だからね。だがこの鉛筆に隠されたギミックを知った時には驚きの顔をしていることだろう。

「なにそれ？」

「これはただの鉛筆だ。だけどこの側面に数字が書いてあってね

」

俺は側面に刻まれてある数字を見せようとした。しかし赤久奈さんが急に鉛筆を奪い取った。

「ふんっ！」

「あ、あああああああ！？」

そして次の瞬間、なぜか赤久奈さんは俺の鉛筆を一瞬の内に真つ二つにしては地面に叩きつけて勢いよく踏み潰した。

ボキンッ！ という鈍くもあり綺麗な音と共に鉛筆は粉々になり、原形を失っていた。

「ど、どうするんだよ赤久奈さん！？ これじゃあ明日の小テストがピンチだぜー！」

「運で小テストやつても意味ないでしょう！？」

俺は赤久奈さんに対して怒ったのだが、赤久奈さんに正論を言われてしまったため「うう……」と呻く事しか出来なかった。

それにしてもさすがに壊す必要はなかったと思うのだが……。

「はあ……貴方どうやって入学したの？」

「失礼な。入学した頃まではちゃんと覚えてたよ。その後は……その、とある理由によって物忘れが激しくなったというか……記憶力が悪くなったというか……」

「凄く素晴らしい記憶力を持っているのね」

赤久奈さんの嫌味に俺は再び「ううつ」と呻く事しか出来なかった。

「仕方がないわね、今日は私が勉強を見てあげるわよ」

「はあ……ん？　今なんて言った？」

「勉強見てあげるわよ」

「え？　どうして？」

俺はいきなり何の脈絡も無いことを言われたため少し戸惑ってしまった。

「私は馬鹿が嫌いなものよ。同じクラスに馬鹿がいると思うだけでも吐き気がするわ」

俺は汚物扱いですか。

「だから貴方の頭を改善するためにも付き合っただけよ。安心しなさい。私が勉強を教えてあげるんだから明日の小テストは満点よ」

「は、はあ……」

赤久奈さんの言葉に俺はやる気無く相槌を打っておいた。

そのとき俺はチラッと赤久奈さんの顔を覗き見たのだが、なぜか生き生きとした、可愛い顔をしていた。

第1話? 『出会い』 雲取巨視点

「それじゃあ早く私の家に行きましょう！」

赤久奈（あかぐな）さんはそう言いながら駆け足になった。

「……………あれ？」

俺はふと自分でも似合わないと思いながらも少し頭を捻らせ考えた。

この流れだとまるで……………。

「まるで、赤久奈さんの家で勉強するみたいだね」

と、俺は戯言を言った。

「? 勿論私ん家（ち）で勉強するに決まってるじゃん？」

そして赤久奈さんはまるで「当然でしょ？」と言いたげな顔をしてきた。

「……………」

俺は三点リーダー四つだけという台詞とも言えない台詞を言った……つもりだ。そして瞬時に我が身を体育の授業で習った『回れ右』で一、二、三と回転させた。

「そんじゃ、俺家あっちなんで」

赤久奈さんにそう語りかけてから俺は今歩いてた道とは反対方向を歩き始めた。

「何帰ろうとしてんのよ!？」

「グヘエツ!？」

俺は赤久奈さんの美しい綺麗な左手によりワイシャツの襟を捕まれ少し首を絞められるという体験を味わう羽目になった。おかげで「グヘエツ!？」とかいう漫画でしか聞けないであろう奇妙な声を出してしまった。

「何帰ろうとしてんのよ!？」

赤久奈さんは先ほどと同じ質問を一字一句間違えずに言った。俺はこのときに「あ、凄い記憶力羨ましいなあ」と思ってしまった。

「いやさ、今日はもう遅いから家に上がるのは悪いよ。それに親御さんも驚くと思うよ」

「それなら大丈夫よ。パパ……両親は共働きで家にいないから」

多分だが今「パパ」と聞こえたような気がする。今日に限って録音機を用意していなかったことを俺は自分自身にしばらくの間は恨み続けるだろう。赤久奈さんみたいな冷静キャラが「パパ」とか言うのは以外で少し新鮮だった。

「両親が家にいないんだったらなおさら危ないよ。俺ってこう見えても男だから性的な意味で襲うかもしれないよ?」

俺は冗談ではなく真面目に言った。実際に中学生の頃に仲の良かった幼馴染の女の子の家に遊びに行ったときに襲っちゃって朝起き

たらその幼馴染の女の子と一緒に裸でベッドの中に……まあこの話は別の機会にしようか、俺にとってはあまり愉快な思い出でもないしあまり覚えていないし。

「わ、私はそこまで軽い女じゃないわよ!？」

赤久奈さんは少し顔を赤らめながら叫んだ。まあこれが普通の反応だわな。

「それに私は馬鹿を目の前で放っておくほど飼い主失格じゃないわよ」

あらら、今度はペット扱いですか俺は。

「でも着替えが……」

「私の貸してあげるわよ」

それはさすがに問題があるような……。

「……あれ？　もしかして雲取（くもとり）くんって女の子の家に入ったことが無いの？　もしかして照れてるの？」

「……うん、実は女の子の家に入ったことが無くてね、今でも心臓がバクバクしてるよ」

赤久奈さんがムカつく顔をしながら言ってきたので、俺は丁寧に嘘を吐いた。まあ幼馴染の女の子の家に遊びに行った出来事はノーカウントにしておこう。本当にあまり愉快な思い出でもないしあまり覚えていないし。

「それじゃ、今日が初体験になるわね！　どうする？　今日を逃

したら一生来ないかもしれないよこんなチャンス？」

なんか目的が変わっているような気がするが、それでも赤久奈さんは俺を自分の家に誘おうとすることを諦めてはくれないらしい。テンションもウザイぐらい上がってきている。

さすがにここで折れないと男が廃るってやつだな……。

俺はそう心の中で呟き、赤久奈さんに向かって言った。

「わかったよ。それじゃあお邪魔するよ」

そして赤久奈さんは「パアッ」と効果音が付きそうなほど可愛らしい笑顔を見せた。

「それじゃあ善は急げね！ 早く帰りましょ！」

何を急いでいるのか赤久奈さんは急に走り始めた。俺も赤久奈さんの後を追いかける形で走った。

次の日、まあ俺からしてみれば5月21日なのだが君たちからしてみれば……明日の出来事だろう。

などという意味の分からないことを心の中で思いながら自分の教室の机でぐったりと寝ている。他の人から見たらさぞ死体と間違われるんじゃないかと自分で自画自賛してしまうぐらいの死体っぷりだ。嬉しくないけど。

……正直者な俺が正直に答えよう、疲れた。

俺は疲れきった体をなおも動かさずに死体っぷりを演じた。

「よう、雲取。おはよ
逝ってこいよ」

「死んでねえよ」

じゃなくてさようならか、元気に

今登校してきたのか、俺の横の席でもある友人の本仁田秀樹（ほにたひでき）が挨拶をしてきた……のだがその挨拶の仕方がまるで不吉そのものだったため、俺は「おはよう」という朝で使われるだろう典型的な言葉を使わずに突っ込みを入れた。

本仁田くんは先ほども説明したとおり俺の友人の一人で学力は平均的だ。顔も黒い短髪でさっぱりしたさわやかな顔をしているのだが、やはりどこか平均的な顔をしていた。高校1年からの付き合いで、出会った当初から俺呼んで『平均男』と勝手に命名した。試しに過去に一度だけその名で呼んでみたら、直後に本気右アツパーを喰らったので封印せざるを得なかったのだがいやはや残念な話だ……。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

「そういえば今日は物理の小テストだな。ちゃんと勉強してきたか?」

本仁田(ほにた)くんがまるで思い出したかのように俺に尋ねてきた。俺は条件反射で「うっ!」と呻き声を漏らしてしまった。

「ははっ、まあ勉強なんか普通しないよなー。定期考査が終わったばっかなのに勉強するだなんてなんか勿体無いもんなー」

俺の呻き声を『勉強していなかった』と受け取ったのか、本仁田くんはホッとした顔をしながら自分の席に座っていった。

だが、本仁田くんは俺の呻き声が『勉強していなかった』から漏れたものではなく、『昨日の勉強』を思い出して漏れたものだとはい一遍も想像しないだろ。しなかっただろう。

昨日、俺は赤久奈(あかひさな)さんと話したとおり彼女の家で勉強を教えてもらった。

普通、女子の部屋に上がると漫画とかならドキドキするはずなのに、そんなことはなかったぜ。むしろ問題の解答を間違えるたびにビンタをしてるので「今度はいつビンタがくるのだろうか?」と別の意味でドキドキしてしまった。

それだけならまだしも、昨日は寝ないで勉強をさせられた。文字通り一秒も寝ないで。世間一般で言う『一夜漬け』と呼ばれたり『夜鍋』とも呼ばれるだろう。

太陽が昇り始めた頃には、俺は頭を揺らしながら問題を解いていた。

そんなスパルタな勉強時間に付き合わせた元凶である赤久奈さんはまるで十分な睡眠を取ったかのようなさわやかな顔をし続けている

た。

そして登校中も、意識が半覚醒となっている俺を差し置いて赤久奈さんは「元気ハツラツツ！」と叫び出しそうな顔をしながらバンバン問題を出してきた。そのときの俺は意識が目覚めていなかったため適当に答えていただろう。その結果何回かビンタを貰い、学校に付いた頃にはビンタの影響で目を覚ましていた。気が付いたときには頬が腫れていた。

その後、赤久奈さんは「ちょっと用事がある」と言い下駄箱で別れた。より正確に言うなら開放された。そしてすぐにトイレに直行してビンタされた箇所を水で冷やし、教室に辿り着いてからは死んだかのように眠りについていたというわけだ。

……今思えば本当に頑張ったと思うよ俺は。

そんな独白を繰り返している、学校のチャイムが響き渡った。

俺は「充分に寝れなかったな……」と目を擦りながら呟いた。

まあ俺の学校のHRなんかネタにするほど面白いことを話さない
ので割愛しよう。

現時刻は俺にとっては決戦の日でもある物理の時間だ。

「はい、それじゃあ小テストを始めるよー」

傍から見れば若く見えるような茶髪の長い髪を持った女性がクラス全員に対して言った。この方こそが物理の教師でもある浅間尾根（あさまおね）先生だ。浅間尾根先生は手に数枚のプリントを持ちながら「これから配るから早くしろ」と顔で訴えていた。俺を含んだほとんどの生徒たちが机の上に置いてある教科書や参考書などを机の中に片付けていつでもテストを受けれる体勢を作った。

「それでは配布するから私語を慎むようにね」

そう言いながら浅間尾根先生は前列の生徒全員にある程度の枚数だけプリントを渡した。そしてまるでバトンリレーのように後ろへ後ろへとプリントを渡していった。ちなみに俺の席は一番後ろなのでやってきたプリントの枚数は一枚だ。これは当然の結果なのだが少し寂しさを感じるのはなぜだろうか？

俺はふと、本当にふと思いつきで赤久奈さんの席を見た。赤久奈さんの席はクラスの中で、まるで自分がクラスの中心人物だと訴えているような威圧感を感じた。その赤久奈さんが俺の視線に気がついたようでこちらを振り向いた。そして急に口パクをしてきた。

満点以外は許さないわよ。

なぜかそう耳で囁かれた気分になった。俺は背筋が凍った気分を味わった。

そして俺は「ふふん」と自信満々に呟きながら赤久奈さんに対して口パクでこう伝えた。

馬鹿か出来るわけねえだろ！

俺が伝え終える前に赤久奈さんは前を向き直っていたので伝えることが出来なかった。

それにしても俺が満点を取れるわけがないだろう。あの天才はそんなことすらわからないのか。と心の中で文句を言った。

実際にこの山多摩（やまたま）高校の小テストは小テストと冠しては駄目だろうと思えるぐらい無理難題な問題が数問含まれている。基本的に満点を取れるのは手で収まるぐらいの数しか出てこない。ちなみに俺は毎回0点ですよ。

「はい、それでは始め！」

浅間尾根先生は手をパンツと綺麗に鳴らした。テスト開始の合図だ。

「まあ気楽にやりますかね」

俺は誰にも聞こえないように呟きながらプリントに書かれてある問題をサッと読んだ。

「……………」

俺はその問題を読んで絶句してしまった。いや、テスト中なのだから口を閉じているのは当然なのだが、例えば口が利けたとしても絶句していただろう。

問題が、簡単すぎる。

勿論、中には難しいものもある。俺みたいな馬鹿でも「あ、これは難しいな」と思える問題が存在する。だけどその問題に必要な公式や計算式がパツと思いつく。それは前の自分ではありえなかった思考回路だ。

俺は自分の頭を疑いながらも、プリントに自分が正しいと思う解答を書き進めていった。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

数分も掛からないうちにうちに、俺は問題文の問いを自身のある解答で埋め尽くした。

そして頃合いを見計らってか、浅間尾根（あさまおね）先生が「止めてください」と透き通った声で言った。

周りからは「マジかよ早ッ!？」という声が飛び交っていた。どうやら他の皆は苦戦をしたらしい。

「はい、それでは後ろから前に送ってください」

と、浅間尾根先生が言うので、俺は言われたとおりプリントを前のほうに送った。

「な、なあお前出来たかよ?」

急に隣にいる本仁田（ほにた）くんが自身無さそうに聞いてきた。どうやら本仁田くんも出来なかった様子だ。

「ま、まあまあ出来なかったかな?」

俺はいつもどおりの様子で本仁田くんに返した。すると「だよなー、いくらなんでもあの問題は難しすぎるよ」と呟いていた。

俺も「まあ半分ぐらい取れてれば良い方かな?」と呟いていた。

その後、残った時間で物理の授業が行われた。
勿論、ノートで埋め尽くされた文字は理解不能なものばかりだった。

「それでは、今日のテストは放課後までに返すので」

浅間尾根先生がそんな不吉なことを言ってから、チャイムの音と同時に教室を出て行った。

俺も次の授業の準備をしようとバッグの中身を整理しようとしたら、赤久奈（あかぐな）さんがなぜか俺の目の前に立っていた。

「……………」

赤久奈さんは無言で俺の前に立っているだけなので俺は無視して次の授業の準備に取り掛かった。

「無視しないでよ!？」

バンッ！ と赤久奈さんが勢いよく俺の机を手で叩いた。少し怖かった。

手を机で叩いたときに少し乾いた大きな音が教室中に響き渡り、半分ぐらいの生徒が俺と赤久奈さんの方をチラリと見てきた。

「……あの二人が一緒にいるなんて珍しいな」

「……つかあの二人って仲良かったっけか？」

「……そんなわけないでしょ？ だってあの二人ってまったくの対極の位置にいる人物じゃない？」

「そうだよな、馬鹿と天才が中良いわけないよな」

そんな教室中にいる生徒の小声がチラチラと聞こえてくる。そして最後のほうを聞いて俺は少しショックを受けた。堂々と馬鹿と言われるならまだしも小声で馬鹿といわれると泣けてくるものだ。

「……ここじゃ話しづらいわね。ちょっと来なさい」

そしてその小声を聞いていたのか、赤久奈さんが俺の手を掴んで教室の外へと歩いていった。勿論のことなのだが俺は手を掴まれているので一緒に教室を出る破目になってしまった。

「おおおお！ 一緒に出て行っただぞ！？」

「なになに！？ そういう関係なの！？」

「これをミーは『愛の逃避行』と題しましょう」

……なんか凄い勢いで誤解を招いているような気がするの、面倒なので気のせいだと思っておくか。

「……雲取（くもと）い……ッ！！」

そして教室を出る瞬間に俺は「まるで好きな女の子を取られた哀れな男の子」的な雰囲気醸し出すクラスメイト約1名の恨めしそうな声を聞いた気がするが、本当に気のせいだと思うことにした。

「なんつつつでお前なんだよお！？」

「お、落ち着け川苔（かわのり）！！」

……なんか「まるで好きな女の子を取られた哀れな男の子」的な雰囲気醸し出していたクラスメイトが教室の中で叫んでいる声が聞こえてきたのだが、心の底から面倒だと思うので気のせいだと決めた。

そして赤久奈さんに連れて行かれるがまさに無人の教室に辿り着いた。

なんだろう？ カツアゲされるのだろうか？

「で？ どうだったの？」

なんの脈絡もなく赤久奈さんが尋ねてきた。主語すらついてないその疑問文に俺は解きようがなかったので「？」と顔で訴えるしかなかった。

「今日の小テストよ」

赤久奈さんが痺れを切らしたかのように付け足すかのように言うてくれたので、俺は「ああ、それね」と謎が解明した顔で訴えた。

「勿論、今日は半分ぐらいいは取れている自身があるよ」

「半分じゃ意味無いわよ！？」

俺が自信満々に言うと、赤久奈さんは心底残念なものを見る目で叫んできた。

……半分でも凄いと思うんだけどなー。

「いい、今日帰ってきたときにちゃんと私に見せなさいよね。見せなかったら殺す。見せて満点じゃなかったらこーろーすー」

赤久奈さんが間の抜けた声で言ってきた。

おいおい、それじゃあ背水の陣じゃないか。なぜ俺はこんな日常生活の中で命の危険を感じなければならぬのだろうか？

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

「それじゃ、テストの結果を楽しみにしているわよ」

赤久奈（あかぐな）さんは「バイ」と手を振りながら先に無人の（もつとも、俺と赤久奈さんがいるので無人ではない）教室を出て行った。

……もしかしたら今日が俺の命日になるかもしれない。
俺は静かに目を閉じ、合掌をした。

時というのは残酷なもので、例えどんなに抗おうと流れ行く時間を塞き止めることは不可能に近い。

つまり何が言いたいのかというと、現在時刻はテストが返却される放課後になっているということである。今日に限って時間が経つのが早く感じる。

暇人なのか、浅間尾根（あさまおね）先生は既にいつでもプリントを配れる状態になっていた。

「それでは今日のテストを返します。出席番号1番の方から来てください」

浅間尾根先生は早速出席番号1番の生徒の名前を呼び、次々と生徒たちがテストを返してもらっていた。

テストを返してもらった生徒の顔は、あるものは安心しており、あるものは絶望していた。

「次、雲取くん」

程無くというかあまり時間が経たないうちに俺の名前が呼ばれた。俺は少し憂鬱な気分にもなりながらプリントを返してもらう。

「……雲取（くもとり）くん」

「？ はい？」

プリントを受け取ろうとしたとき、なぜか浅間尾根先生が睨んできた。

「……後で職員室に来なさい」

浅間尾根先生はそう言い残し、まるで投げ捨てるかのように俺にプリントを渡してきた。

「な、なんなんだよ……？」

俺は少し戸惑いながらも浅間尾根先生から距離を離し、自分のプリントを確認した。

俺の名前の横には、俺とは縁の遠いはずだった『満点』という文字が書かれてあった。

「……………！」

俺は驚き、そして緊張しながらも何度も何度もその『満点』の文字を確認した。

正面から見ても満点。右から見ても満点。左から見ても満点。上から見ても満点。下から見ても満点。裏から見ても……さすがに裏面からは確認できなかった。

それでも、俺が、この俺が満点を取ったという事実がここに残っ

た。

ただ、少し呆気無さ過ぎてリアクションがどうにも取りにくかった。

「……よお、どうだったよ……？」

急に本仁田（ほにた）くんが憂鬱な顔をしながら聞いてきた。顔の様子から察するに残念な結果になっていたらしい。

「ま、まあまあかな……？」

俺はそんな本仁田くんの様子を察し、適当に誤魔化した。

「おい、こっちだ雲取くん」

職員室に入室してすぐに浅間尾根先生は俺に気付き手を上げて位置を示してくれた。

全員のテストが返却されたその後、俺は言われたとおり職員室に訪れて浅間尾根先生の所までやって来ていた。

「先生、一体全体なんの用でしょうか？」

俺は開口一番、浅間尾根先生に質問した。対する浅間尾根先生は「えっと……そのだな……」と少し言いにくそうな仕草をしてから言った。

「お前さ、もしかしてカンニングしたんじゃないのか？」

「……………へ？」

浅間尾根先生がいきなり突拍子も無いことを言ったので、俺は間抜けな声を出してしまった。

「いやな、お前のことを疑っているわけじゃないんだけど今までのテストの結果を考えてみるとどうにも納得が出来ないんだよ」

浅間尾根先生がそんなことを言ったため、俺は「ああ、なるほど」と納得した。

確かに俺みたいな頭の悪い生徒が小テストとはいえいきなり満点を取ってしまうのは不思議どころの話ではない。それはもう疑いのある話である。当事者の俺でさえ疑っている。

ただハッキリと言っておくが、カンニングなんてしていない。

ただまあ、そんなこと言っても簡単に信じてくれるわけ無いか……。

「先生を信じて正直に言え、カンニングしたか？」

「してません」

俺は先生のことを信じた。

「……あのな、確かに言いにくいことかもしれないが事実はある。でないと色々と問題が起こるんだ」

浅間尾根先生がそう言った瞬間、俺は「あ、コイツ疑っているな」と心の中で直感してしまった。信じた俺が馬鹿だった。

「せめて証言があればいいんだけどな……」

浅間尾根先生がまるでワザと俺に聞かすように大きな声で言った。

大変ムカついたので殴ろうかと思ったが場所が場所一（職員室）なので止めておいた。

それにしても証言ね……。そんな都合のいいものが存在するわけ

「私が証人になれますよ、浅間尾根先生」

あった。

まるで赤久奈さんは、この瞬間、この刹那を見計らったかのよう
に職員室に入室してきた。

第1話? 『出会い』 雲取亘視点

浅間尾根（あさまおね）先生は、目を見開きながら赤久奈（あかぐな）さんのことを見ていた。

「えっと、証人とはどういうことかしら赤久奈さん？」

そして浅間尾根先生はすかさず赤久奈さんに対して質問をした。

「それはですね、昨日私は雲取（くもとり）くんにつきつ切りで勉強を見てあげたんです」

「あー……ああ、それなら俺も証人になれますね浅間尾根先生」

浅間尾根先生が口を出す前に、長尾丸（ながおまる）先生が思い出したかのように口を挟んできた。

「どういうことですか長尾丸先生？」

「いやあのね、昨日雲取には補習をさせてただけどその時に赤久奈も一緒に居たらしくて鍵を返しに来るときに一緒に来てたんだよ」

浅間尾根先生の鋭い目線を気にせず、長尾丸先生は淡々と言い述べた。

俺はこのときに限って、長尾丸先生のことを見直した。

「……なるほど、確かに赤久奈さんが勉強を教えればあるいは満点を取れるかもしれませんね」

浅間尾根先生は「ふう」と溜息を漏らしながら椅子に寄りかかっ

た。

「雲取くん、疑って悪かったわね」

「あ、いえ別に……」

急に浅間尾根先生が態度をコロツと変えてきたので俺はつい戸惑ってしまった。元々、浅間尾根先生自身もそこまで言うほど疑っていなかったのかもしれない。

俺はてっきりコレで解放されて家に帰れる。そう思っていたが、

「許しませんよ」

なぜか赤久奈さんが怒りを露にして言った。

「……まあ疑ったのは悪かったわよ赤久奈さん、こうして反省しているし」

「人を疑ったらそこから戦争ですよ浅間尾根先生」

おそらく俺のことを話しているはずなのに、なぜか俺は蚊帳の外
の気分を味わっていた。

それにしてもどうして俺のことなのに赤久奈さんが怒っているの
か皆目見当が付かない。

「それじゃ、一体どうやって償えば良いのかしらね？」

「一つだけ、私のお願いを聞いてくれますか？」

「……願いの内容にもよるわね」

赤久奈さんは浅間尾根先生に対して「ありがとございます」と
呟いた。

「それではお願いなのですが」

「

「私が雲取くんの補習を行っても良いでしょうか？」

「……………え？」

俺はつい間抜けな声を漏らしてしまった。しかしそれは浅間尾根先生も同じことで、明らかに驚いた顔をしながら赤久奈さんのことを見ていた。

「それってどういうこと？」と俺が聞こうとした瞬間、今まで会話に入っていなかった長尾丸先生が誰よりも早く行動していた。

「いやははは！ 勿論言いに決まっているじゃないか！ うん！生徒が生徒を教えることにより復習にもなり予習も出来る上に定期考査に対しての予想力や対応力も跳ね上がる！まさに画期的な方法だ！」

長尾丸先生の目は、コレまでにないぐらいに輝いていた。ちょっと気持ち悪かった。

「ちょ、何を言っているんですか赤久奈さん！？ 長尾丸先生も何を言って」

「おっと浅間尾根先生？ コレは我が山多摩（やまたま）高校に誇るべき校則第14条の『生徒の自主性』にピタリと当てはまる、

つまり問題は無いということですよ！」

やっと落ち着きを取り戻したのか浅間尾根先生はすかさず反論をするが、長尾丸先生が生徒手帳に書かれた校則を使い正論を言ってきたため喉を詰まらせていた。

「た、確かにそうかもしれませんが補習が必要な生徒を別の生徒に任せるというのは教育者としてどうかと思いますよ!？」

「おっとお！ それはもう安心ですよ！ なんせその点はこのテストが物語っています！」

長尾丸先生はいつの間にか俺のバッグから取り出したのか満点の物理の小テストを浅間尾根先生に押し付けていた。

浅間尾根先生も反論する言葉が見つからないのか「グッ！」と唇を噛んでいた。

「ま、まあ今回に限っては認めてあげますよ」

浅間尾根先生がそう言うと、誰よりも部外者であるはずの長尾丸先生が誰よりも喜んでいた。

「ヒヤッホーッ！ これで放課後の補習生徒の面倒を見なくて済むぜッ！」

ああ、なるほどそういうことかこの駄目教師め！

ただ、その言葉をしっかりと耳に聞いていた浅間尾根先生はピクリと反応した。

「……長尾丸先生？ ちょっといいですか？」

「……あ、やべ。俺早く仕事しないと」

「ちょっといいですよね？」
「……………はい」

長尾丸先生は浅間尾根先生に連行される形で生徒談話室に連れて行かれた。

「それじゃ、私たちも行こつ」
「う、うん……………」

俺も赤久奈さんに連行される形で職員室を出て行つた。
その数秒後、長尾丸先生の断末魔を聞いた気がするが、聞かなかつたことにしておいた。

「結局、補習の件はまた明日改めて聞かないとな」

俺は自分に対して確認するように小さく呟いた。
程よい具合に空に浮かんでいる太陽を眺めながら、俺は赤久奈さんと一緒に下校していた。

「ねー、なんでさっきから太陽を見てるの？」
「んー、この時間帯に太陽を見るのが珍しかったからかな？」

俺がそう適当に答えると、赤久奈さんは「ふうん」と興味無さそうに呟いた。

「そういえば赤久奈さんはどうして俺の勉強を見てくれるの？」

俺は素朴で、素朴な質問をした。

それを聞いて赤久奈さんは少し真剣な顔になった。

「……私ね、勉強しなくても高得点が取れるんだよ」

「うん、自慢だね」

俺がそう嫌味を言うと、赤久奈さんは「うん、そうだね」と言っ
た。どうやら本人も自覚しているらしい。

「だからね、雲取くんと勉強したときにさ、ああ、勉強ってこ
んなに楽しいんだ……って初めて思えたんだよ」

「……………」

それは、俺にとっての嫌味。だけど赤久奈さんにとっての娯楽だ
った。

「だからね、勉強を見てあげるとかじゃなくて、勉強を見たい
って言ったほうが正しいのかもしれないね。私は勉強をしたいんだよ。
だからこう言うね」

赤久奈さんは少し切なそうな顔をしながら、俺に対して言った。

「一緒に勉強してもいいですか？」

そのときの俺の解答は、既に決まっていた。

「俺の記憶力の悪さは性悪だよ？」

きつとここから、俺の勉強は始まったんだと思う。

間章 『コンプレックス』 三人称視点（前書き）

今回の話は別に読まなくても平気なシーンです

間章 『コンプレックス』 三人称視点

五月末の頃、眼鏡を着けた少年 雲取亘（くもとりわたる）は自室で勉強していた。

ここ一週間で雲取の勉強方法は変わり、目で見て分かるように学力が上がっていた。

それは紛れも無い雲取自身の努力の結果ではあるが、雲取本人はそう思っていない。

「……ふう、ちよつと休憩」

雲取はそう呟いてから、椅子から立ち上がってベッドに飛び込んだ。

弾力を持ったベッドは雲取の疲労しきった体を優しく包み込んだ。

「……………」

雲取はベッドの上で横になりながら考え事をしていた。

雲取には大切な友人でもあり恩人でもある赤久奈奈乃香（あかくななのか）と呼ばれる、黒髪で美しい女性がいる。

赤久奈は、雲取に勉強を教えた人物であり、雲取にとっては唯一無二の友達だ。

「……なんか胸がモヤモヤするなあ……………」

雲取は自分の胸を擦りながら呟いた。

雲取は赤久奈のことが好きだった。

ただ、その好きという思考そのものは理解しているのだが、それが果たして「友人として好き」なのかそれとも「異性として好き」

なのかがハッキリしていなかった。

「……………」

雲取は急に起き上がり、そして部屋に備え付けられてある姿見の前に立った。

「……………はあ、やっぱり苦手だな」

雲取は自分の姿を映し出す姿身に触れながら溜息を吐いた。

姿見には当然の如く雲取の姿が映し出されていた。

そして雲取はその姿をジックリと確認し、今度は眼鏡を外して自分の顔を眼を凝らしてみた。

「……………やっぱり駄目だわ」

雲取はそう呟いてから、眼鏡を着けなおした。

雲取は自分の顔に少なからずコンプレックスを感じていた。

努力できるものなら直したいと本人は強く願っているのだが、ちよつとやそつとの努力では顔を変えることは出来ない。一度は本気で整形手術をしようと考えていたが、さすがにそんなことをする金はない。

「……………なんで俺ってこんな顔なんだろうな」

雲取は姿見に映った自分の顔を、静かに触った。

そして「さて、勉強再開」と呟きながら椅子に座りなおしペンを握り締めた。

姿見には、雲取の指紋がクッキリと残っていた。

第2話? 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

5月の最後である31日の日、私こと赤久奈奈乃香あくななのかは放課後の教室でぼんやりと外を眺めていた。

「奈乃香、帰らないの?」

私の意識が眠くなってきた頃に、女友達の月夜見莉亜（つくよみりあ）が声をかけてきた。

「うん、今日はちょっと用事があってね……ごめんね」
「そっか、わかった。それじゃ」

私が申し訳無さそうに言うと、莉亜は何も聞かずに帰ってくれた。そして教室内の人間が私を含めて二人になったとき、私は席を移動した。

「それじゃ、始めよっか」
「うん、今日もよろしくね」

私がある男の子の席の前に移動すると、男の子は少し申し訳無さそうに言いながら勉強道具一式を取り出した。
私も近くにあつた誰かの椅子を借りて座った。

「それじゃ、今日は数学の公式を覚えましょ」
「了解」

私が今日の勉強範囲を指定すると、目の前にいる男の子は返事をしてから数学の教科書を開いては今日勉強したところを復習し始め

た。

男の子の名前は雲取^{くもとり}亘^{わたる}。つい先日行われた定期考査の結果によって教師人からは補習を強いられるようになってしまった……失礼な言い方だがこの山多摩（やまたま）高校の中でも指折りの馬鹿だった。

雲取くんは今までは一人図書室で勉強していたのだが、一週間前ぐらいに色々あつて今では私が勉強を教えてあげることになった。た。

友達と一緒に勉強をする機会がないので、実を言うと私は凄く喜んでいた。

「うーん……やっぱ分からないな」

「どこが分からないの？」

雲取くんが声を唸らせながら考え事をしていたので難しい問題に突き当たったのだと私は勝手に自己解釈した。

「いや、問題が分からないんじゃないやなくて赤久奈さんのことがちょっと分からないんだよ……」

どうやら私の解釈は間違っていたようだ。

「はいはい、私のことはどうでもいいから勉強しなさい」

「いや、これは結構重要だよ？ この謎が解明されないと俺は永遠にこの問題を解かないだろう」

雲取くんが中途半端な脅しをしてきたので、私は「はあ」と溜息を吐いてしまった。

「で？ 何が謎なの？」

「うん、やっぱり皆が下校した放課後の後で勉強するよりはどっちかの家で勉強したほうが効率が良いと思うんだよね」

珍しいことに、雲取くんが真面目なことを言ってきた。これまで「トカゲとイモリの違い」や「漫画雑誌を買うのと単行本を買うのではどちらが効率が良いのか」等と言った勉強とはかけ離れた疑問を呟いていたので大きな進歩だった。

「だけどその謎はこの間解明されたんじゃないかなかったっけ？」

「いや、やっぱり納得できないよ」

私が面倒くさいなと思うながら言つと、雲取くんは「うーん」とさらに考え始めてしまった。

実を言つと、どちらかの家で勉強しようという話は既にいつか前ぐらいには挙がっていた。この間、雲取くんの補習を担当していた長尾丸（ながおまる）先生が「別に学校で補習みたいなことしなくてもいいぞ。むしろするな、俺が早く帰れない」みたいな自己中心的なことを言っていたので折角だしどちらかの家で勉強しようとし合つたのだが。雲取くんの家は姉妹が沢山いるので勉強するには適さない環境となつていいるらしい。

消去法で言うなら私の家で勉強することになるのだが、私の家も弟がいるので勉強には適さない環境になつていいる。正確に言つと恥ずかしいから雲取くんに弟を見せたくないだけだ。

そして妥協に妥協を重ねて結局学校で勉強するという結論に落ち着いたのである。

「それにしてもこの間遊びに行ったときは弟さんとは会わなかったけど？」

「あのときはちょうど友達の家泊まりに行っていたのよ。だから雲取くんを家に誘えたの」

「あ、それじゃあ弟さんが泊りとかで家にいなかったらまた赤久奈さんの家に遊びに行くことが出来るの？」

「……まあそういうことだけど。そんなことより勉強しなさい！」

いつの間にか長話をしてしまった。

少し反省しながら、私は雲取くんに勉強を強制させた。

そして日が傾いて、今日の勉強時間も終了を迎えていった。

補習が終わって数時間後ぐらい。私は家に帰ってテレビを観ていた。

現在の時刻は8時ぐらい。そろそろ私の好きな番組が始まる時間だったのでチャンネルを回した。

「ただいまー」

そしていざリモコンに手をつけようと思った瞬間、玄関から聞きたれた声が響いてきた。

「あ、また両親いないの？ 姉ちゃんただいまー」

「おかえり奈蔵（なくら）。アンタ最近帰ってくるの遅くない？」

「いいじゃん別に、姉ちゃんに迷惑かけているわけじゃないんだし」

私が自分の弟でもある奈蔵に対して叱ったのだが、叱られた奈蔵本人には反省の色が見られなかった。

第2話? 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

赤久奈奈蔵（あかぐななくら）。それが私の弟の名前だ。

現在は中学二年生で校則が緩いことをいいことに髪の毛を金髪に染めている。

金髪に染めると不良のイメージが偏りそうなのに、奈蔵は元々の顔立ちが良いためかむしろ金髪が似合い学校では人気者扱いされているらしい。

私は勉強しか出来ない地味な女の子だから、そんな奈蔵のことが少し羨ましいと思うときがある。

「奈蔵、ご飯食べる?」

「いや、食べてきたからいいわ」

私が質問すると、奈蔵は手をぶらぶらさせながら返事をしてソファに体を預けた。

「そだ、俺明日友達ん家（ち）に泊まりにいくから家にいないわ」

「え? うん、分かったけど……もしかしてまた女の子の家?」

「そうだよ、街中ですんげー可愛い女性に出会ってさ。これがまた独身なんだってよ」

「ちよ、独身ってことはまた年上の人!？」

「そ、今度は干支が同じ」

奈蔵が平然と返事をしてきたのに対して私は頭がクラッとなったしまった。

先ほども言ったとおり奈蔵は顔立ちが良い。そのため女性にモてる。

この間なんて家のポストの中にラブレターが10通ぐらい詰めら

れていたほど女性人からモテている。

ただ当の本人である奈蔵は年上の美人が好みらしい。よく街中に出かけては女性に話しかけている光景を何度か見たことがある。そのたびに初対面の人と仲良くなれるのがとても妬ましい。そのたびに私は奈蔵に冷たい視線を送っていた日々を思い出してしまった。

「今更だけどさ、流石に年上の女性を“友達”呼ばわりするのはどうかと思うけど」

「俺にとっては友達だよ」

奈蔵は「さしろちゃん」とおそらく明日泊まりに行く家の女性の名前を気持ち悪い声を出しながら呼んでいた。うん、気持ち悪い。

「……そっか、明日いないんだ」

奈蔵が家にいないことは何回かあるのだが、それでも私は少し寂しさを感じた。

次の日。私はいつもどおり登校しては自分の席に腰を落ち着かせた。

「いやー、5月も終わってしまいましたなー」

友達の莉亜（りあ）が「うんうん」と何かに納得しながら近づいてきた。本当に何に納得しているのだろうかコイツは？

「そうだね、そろそろ梅雨が始まるよねー」

私は窓の外をぼんやりと見ながら言った。今日はまだ雨が降って
いなかったから傘が必要ないかもしれないが、今度からは必要にな
ってくるかもしれない。

「だよねー、今日の午後から梅雨が始まっちゃうもんねー」

早速傘が必要になるかもしれない。

「え？ 今日雨降るっけ？」

「うん、なんか今日は結構降るらしいよ」

「あちゃー……私今日傘持ってたんだけど」

「お、奇遇だね。私も傘持ってたんだけど忘れちゃったんだぜ！」

「……何で雨だと分かってたのに忘れてくるのよ莉亜？」

私がジト目で莉亜に尋ねると、莉亜は「あははー、ちょっと忙し
くって……」と言い訳していた。

「あああ赤久奈！ 俺が傘持ってるぞ！ よかったら今日の放課
後一緒に帰らないか！？」

なぜか急にクラスメイトの川苔（かわのり）くんがやけにテンシ
ョンを高くしながらこっちにやって来た。

「お、なんだ川苔傘持ってるの？ んじゃー遠慮なく入れさせて
もらうねー」

「お、おい！ 俺は赤久奈さんに聞いていて月夜見（つくよみ）
には聞いてねえよ！ 引ッ込んでろ！」

「なんだとー！ 別にいいじゃないか一緒に入ってたって！ よく

見たらそれ折りたたみ傘じゃないか！ お前の心はその折りたたみ傘のように器が小さいなー！」

「か、傘が小さいのはどうでもいいだろっ！？」

突然、川苔と莉亜が喧嘩をし始めてしまいその場が騒がしくなっ
てしまった。

「ま、まあまあ……落ち着きなつて莉亜。川苔くんも騒がないの」

このままだと拉致があかなそうだったので私はとりあえず二人を
落ち着かせた。川苔くんは意外なことに「あ、赤久奈が言うんだっ
たら仕方がないか……」とすぐに落ち着いてくれた。それに呼応す
るかのように「むう……」とどこか納得できないといった顔をしな
がら莉亜も落ち着いてくれた。

「私のことは気にしなくていいからさ。川苔くんは莉亜を傘に入
れてあげてくれない？」

「え、いや……でもそれじゃあ赤久奈はどうするんだよ？」

「実を言うと私は学校に置き傘しているの。だから大丈夫。それ
に川苔くんの家って莉亜の家と近いでしょ？ だから莉亜のことを
送っていつてくれると嬉しいなー」

「あ、赤久奈がそう言うんだったら送ってくよ……感謝するんだ
な月夜見」

川苔くんは少し納得いかないといった顔をしながら私の提案を肯
定してくれた。そして莉亜も「やったー！ 川苔大好きー」と喜ん
でいた。

第2話？ 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

本当のことを言ってしまうと置き傘なんてしていない。でも傘に
関しては心当たりがあるので心配はなかった。

「今度ナルド奢ってやるよ。なあに、傘を用意していたご褒美だ」
「別に赤久奈（あかぐな）さんのために用意しただけで月夜見（
つくよみ）のために持ってきたわけじゃねえよ」

川苔（かわのり）くんと莉亜（りあ）のやりとりを聞いて私はつ
い笑ってしまった。ちなみに『ナルド』というのは有名なファース
トフード店の略称である。正式名称は『クドナルド』だ。

私は二人のやりとりを耳に聞きながら、少しどんよりとした空を
見ていた。

そして放課後。担任の長尾丸（ながおまる）先生の指示によりH
Rはあつと言う間に終わった。

窓の外を眺めてみると、莉亜が言ったとおり雨が降っていた。

「ようし、それでは帰ろうではないか川苔くんよ！」

「なんでお前が偉そうにしているんだよ！？」

教室のドア付近では川苔くんと莉亜が帰る準備をしていた。

「あ、おーい奈乃香！ 私は川苔に送ってってもらってから先に
帰るよー！」

突然、莉亜が手を振りながら声をかけてきたので、私も手を振りながら「ばいばーい」と返事をした。

「あ、川苔くん。莉亜をよろしくね」

「ま、まかせてくれよ赤久奈さん！！ 無事にお送りしてくるよ！！」

川苔くんに声をかけると、なぜか顔を赤くしながら返事をしてきた。

「ほら行くぞー」

「あ、待ってっ！」

そして莉亜が先頭になって二人とも先に帰っていった。

「ふう、それじゃ私たちも帰りましょっか」

私は当然の如く雲取くんの腕を掴んだ。雲取くん自身も気付いていたのか、「まあ礼もかねて」と呟きながら鞆の中に入れてあった折りたたみ傘を取り出した。

「さっすが雲取くん！ 用意が良いなー」

「まあ折りたたみ傘だったら毎日バッグの中に詰め込んでるからね」

「それじゃ行きましょ」

「うん」

私も雲取くんと一緒に教室を出て行った。

私と雲取くんは一つ同じ傘の下に入って帰路を歩いていた。
折りたたみ傘だということと二人同時に入っていることもあつて
かやはり体全体を防ぐことが出来ずどうしても肩や鞆が濡れてしま
う。

「今度からはちゃんと傘を持ってきたね」

「大丈夫よ、明日からはちゃんと用意するわ」

「もう6月だし折りたたみ傘を持っていたほうがいいかもしれな
いね。突然雨が振るってことも考えられるし」

「それもそうね」

私と雲取くんはそんな他愛もない会話をしながら静かに歩いてい
た。

この時間帯にこの辺りの道を通る人はいないので、道路は私と雲
取くんしか存在しなかった。

その場に響く音は雨と私たちの話し声だけで、なんだかとても綺
麗だなと思ってしまった。

「雨の音が気持ちいいね」

「……………うん」

雲取くんも私と同じことを考えていたのか、どこか気持ち良さそ
うな顔をしながら言った。

……………そういえば、男の子と一緒にの傘に入って帰るのって奈蔵（な
くら）を除いたら初めてだな。

「……………相合傘みたいだな」

「？　なんか言った赤久奈さん？」

「別にになにも言っていないわよ」

私は少し顔をにやけさせながら雲取くんのことを見た。雲取くんは頭に「？」が付きそうなほど疑問な顔をしていた。

「……赤久奈さんとうとうして一緒に帰ると、なんだかあの頃を思い出すなあ」

「あの頃って？」

「中学生の頃、仲の良かった幼馴染がいてね……雨が降った日はこうやって一緒に帰ってたんだよ」

「へえ、ちなみにその幼馴染の子はなんて名前なの？」

「日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）って言う名前だった」
「……“だつた”？」

雲取くんがなぜか含みのある言い方をしたのでつい気になってしまった。

「ああ、今もその名前なんだけどね、ちょっと訳ありで別の名前も使っているんだよ。まあ霞のことに关しては昔彼女自身に『あまり話さないでよね』と口止めされているから詳しく話せないよ、ごめんね」

「ふうん……」

雲取くんがなぜか申し訳無さそうに謝ってきたが、そのときの私は別に謝る程のことだとはちっとも思っていなかった。

その後、私は近い将来に日向沢ノ峰霞という人物と出会うことになるのだが、それはまた別の話である。

第2話？ 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

……それにしても訳ありで別の名前を使っつて一体全体どういった事情があるのだろうか？

その辺が凄く気になったが、『あまり話さないでよね』と本人から釘を刺されているのなら尋ねることは不可能だろう。

そしてその後も他愛のない会話は続いた。

雨が降っているため少し聞こえづらいところもあったが、それでも意思疎通は出来た。

そして夢中で会話をし続けていたら、いつの間にか私の家まで辿り着いていた。

「……雨で体濡れちゃったね」

「……うん」

私と雲取（くもとり）はお互いの体を見合った。小降りとはいえ傘の面積が小さかったため肩や鞆が濡れていた。

「ちよつと家に寄ってく？」

「え、いやいいよ。このまま帰ることにするよ」

さすがに送ってきてもらいながら濡れたまま帰すのも悪いと思い私は家に寄ることを勧めたのだが、雲取くんはその誘いを丁寧に断ってきた。

だがそんな簡単に引き下がる私ではない。

「駄目よ、一応タオルで体を拭いておきなさい」

「いや、どうせ雨の中帰るんだから関係ないよ」

なんとか寄らせようと言い続けるも、それでも雲取くんは頑固として拒否してきた。

「関係あります。それに今日は私の家で勉強するんだから」

「あれ？ 弟さんがいるから駄目なんじゃなかったっけ？」

「弟は友達の家に泊まりに行っているから大丈夫よ、むしろ一人で寂しいくらいよ」

私は少し本音を交えながら言った。すると雲取くんは少し考える素振りをしてから「はあ」と小さく呟いた。

「それじゃ、お邪魔しちゃおっかな？」

「どんどんお邪魔しちやいなさい」

とうとう折れたのか、雲取くんは私の家に寄っていくことになった。

とりあえず体を綺麗にするため、私は風呂でシャワーを浴びた。

「ふう、気持ちよかったあ」

パジャマに着替えた私は頭をタオルで拭きながらリビングに向かって歩いていった。

リビングに向かうと、雲取くんは鞆の中から教科書を取り出して勉強をしていた。

「あ、出たんだ。それじゃ勉強しようか」

私をチラリと見てから雲取くんは鞆の中を漁り勉強道具一式を取り出してきた。

勉強する気があるのは良いことだが、まずはその濡れた体をなんとかすることを優先しようよ雲取くん。

「その前にシャワーを浴びてきてくれないかしら？」

「大丈夫だよ、そこまで濡れてないし」

「駄目でーす。ほら、着替えは私の着てもいいから」

私は半ば強引に自分の部屋からとってきた私服とタオルを雲取くんに渡した。服はなるべく男の子でも着れそうな物を選んできたつもりだ。残念ながら男の子の服がどういったものなのかよくわからないので心配だが、奈蔵（なくら）の服を勝手に取り出してくるのも悪いのでとりあえずこれで我慢してもらうしかない。

「……………これって赤久奈（あかぐな）さんの服？」

「そうよ」

雲取くんは少し苦そうな顔をしながら私が持ってきた服を見ていた。

「あの子の言葉って本気だったんだ……。やっぱり男の俺が女の子が一度着用した服を着るのはいささか問題があると思うんだけど……………」

「？ どうして？」

私が質問すると、雲取くんは半ば諦めた表情をしながら「いえ、なんでもないっす……………」と呟いてきた。

「それじゃ、シャワー借りるね」

「うん、ちゃんと温まってくるのよ」

そして雲取くんは服とタオルを持ちながら風呂に向かっていった。それまでは暇なので、私は本を読むことにした。一週間ぐらい前に学校に置き忘れてしまった本だ。

「……そういえばこの本がなかったら、私は雲取くんこうして勉強することはなかったんだよね」

私は少しこの本に感謝しながらタイトルの部分を撫でた。そこで、大変なことに気がついてしまった。

「……電話置いてきちゃった」

私は洗濯籠の中に入れたワイシャツの胸ポケットに携帯電話を入れていたことを思い出した。

「どうして私って忘れやすいんだろ……」

私は忘れがちな自分の記憶力に少し恨みながら脱衣所に歩いてきた。

「えっと……あつた、よかった」

私は洗濯籠の中から携帯電話を取り出した。そしてすぐに戻ろうとしたとき、ふと風呂場のほうを見てしまった。

勿論、ドアは閉じてあるのだが、それでもシャワーの音が良く聞こえてくる。

「……この扉の向こうでは雲取くんが裸になって ツ!」

自分で言っておきながら顔を赤らめてしまった。目の前に偶然あった鏡には、まるでリンゴのように赤くなった私の顔が映っていた。少し頭がクラツとなってしまうた。急いでこの脱衣所から出てと
りあえず心を落ち着かせることに決めた。

第2話？ 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

そして後一步で脱衣所を出る、という瞬間に足に何かがぶつかる感触を受けた。

「……………」

私はほぼ反射的に足元を見た。すると右足……正確に言うと右足の親指が眼鏡に触れていた。

「これって雲取（くもとり）くんの眼鏡……………」

私は恐る恐る床に落ちてあつた眼鏡を手に掴んでみた。

「床に置きっぱなしにするだなんて危ないなあ……………せめて洗面所に置けば良いのに」

私は扉の向こう側で暢気にシャワーを浴びている雲取くんに文句を言いながら眼鏡を弄んだ。

「そういえば雲取くんって眼鏡かけてたんだっけ？」

私は雲取くんの顔を鮮明に思い出しながら呟いた。

人を顔を見るのが恥ずかしいためあまり人の顔を見ないようにしていたが、そういえば眼鏡をかけていたかもしれないなどどうでもよさそうに思い出した。

「毎日眼鏡かけているから気がつかなかったわ」

私は自分の失態に恥じながら、何と無く眼鏡を着用してみた。

「……………あれ？」

眼鏡をかけても私の身に異変が何も生じなかった。そう、“何も生じなかった”。

「これ……………度が入ってない？」

私は一度眼鏡を外し、レンズが入っているか確かめた。

うん、入ってる。

そしてもう一度眼鏡を着用してみた。

うん、何も生じない。

おかしいな？ 私の記憶だと眼鏡って確か視力の補正や遮光を目的としているはずだと思うんだけど……………。私の場合は視力が『1・2』のため視界が少しぼやけてもおかしくないんだけど……………。

「あ、そういえば確か眼鏡の機能を目的としないお洒落なやつが存在するって聞いたことがあるな……………えっと……………ああ、そうだ確か『伊達眼鏡』ってやつだ」

私は自分の頭の中から『伊達眼鏡』という単語を引っ張り出して、一度眼鏡を外した。

「これってもしかして伊達眼鏡？」

私は誰かに確認したわけでもなく呟いた。

「でも何で雲取くんはこんなものを……………？」

ピンポーンッ！

私の頭が思考に突入しそうになると、まるでそれを邪魔するかのように玄関のチャイムが鳴った。

私はつい携帯電話で現在時刻を確認してしまった。時刻は『19時00分』。親が帰ってくるには早すぎる時間帯だ。

「こんな時間に一体誰だろう？」

私は突然の来訪客に少し疑問を覚えながら玄関まで歩いていき扉の鍵を開けた。

「はー、疲れたー……」

扉を開けると、まるで当然のように私の弟である奈蔵（なくら）が家に入ってきた。

「あ、姉ちゃん。ただいまー」

私はつい呆然としてしまった。そんな姉のことを意にも介せず奈蔵はリビングに歩いていってソファに体を預けた。

「ちょ、奈蔵っ！？ アンタ確か泊まってくるってっ！？」

「ああ、それ？ 無しになった」

やっとのことで気を取り直した私は奈蔵に質問した。すると奈蔵は少し残念そうな顔をしながら言ってきた。

「な、無しって……?」

「あの女さあ、彼氏持ちだった。ふざけんなよあのババア。危なかったんだよ俺? 後もう少してその彼氏さんとバツタリ出くわしちゃう所だったんだから」

奈蔵は「チツ!」と舌打ちしながら言った。どことなく不機嫌そうな雰囲気を出していた。

「ああ、そういえば玄関に知らない靴があったんだけど誰か客来てんの? 女性だったら紹介してよ。ブスだったら紹介しないで」

奈蔵は機嫌を直したのか(なんて軽い男だ)すぐさま調子の良い声で言った。そして私は「しまった」と思ってしまった。

「あ、アンタは早く部屋に戻りなさい!」

「え? どうして?」

「いいから! アンタと姉弟だって思われたくないのよ!」

「うわ、さりげなくひでー」

奈蔵は少し泣きそうな顔をしながら言ってきたが、そんなものに構っている余裕は私にはなかった。

「いいから早く部屋に戻りなさい!」

「……女?」

「男」

「だったら部屋に引きこもる」

奈蔵は私が「男」と言った瞬間すぐに覇気を無くし、とことこ階段を上って部屋に戻っていった。

このとき私は奈蔵の女に興味あるけど男に興味ない性格があるが

たいと思ったことはない。後々から考えてみるとむしろ男に興味がある
と気持ち悪いからどちらかと言うと普通がこの性格。

第2話？ 『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

「ああああああああああああああああ！？」

突然、脱衣所のほうから叫び声が響いてきた。私はビクリッと体を震わせてしまった。

あまりの叫び声に少し耳を塞いでしまいよく聞いていなかったが、雲取くんの声で間違いないと確信していた。

「く、雲取（くもとり）くん！？ 一体どうしたの！？」

「あああ赤久奈（あかぐな）さあああああああん！？」

私が脱衣所に向かって叫ぶと、雲取くんがドタドタとやけに騒がしく音を響かせながらこっちに向かってきた。よほど切羽詰っているのか上半身裸の姿だった。

「ちょ、上っ！ 何か着なさいよっ！」

私は異性の裸をあまり見慣れていないため反射的に眼を瞑ってしまった。

「お、俺の眼鏡が！？ 眼鏡があああああ！？」

「お、落ち着きなつて！？」

「おおお落ち着いてられっか！？ 眼が、眼があああああ！！」

雲取くんはどこかの大佐のように冷静さを失い叫んでいる。顔はタオルで隠しているため伺うことは出来ないがよほど焦っていることが伝わってきた。

「お、落ち着いて雲取くん、コレでしょ。はい」

私は手に掴んでいた眼鏡を静かに雲取くんに見せた。

そして「シュバツ」という風を切る音と共に私の手から眼鏡が消えていた。そして雲取くんの顔に眼鏡が装着されていた。

……早いなおいッ!?

「……取り乱してゴメン」

雲取くんは顔を赤らめながら言った。自分がどれだけ騒いでいたのか自覚していたらしく、恥ずかしそうに顔をタオルで覆い始めた。

「この眼鏡さ、ちょっと大切な物だから……」

「そ、そうだったんだ……勝手に取っていつてゴメンね」

私は「だったら床に置いておくな」と言いそうになったが、なんとか抑えた。頑張ったぞ、私。

「……そのさ、さっき気付いたんだけどその眼鏡って度が入ってないよね?」

私がそう質問すると、雲取くんは「うん」と冷静に答えた。

「やっぱりお洒落目的なの?」

「いや、違うんだ」

雲取くんは少し口ごもりながら、何か躊躇うかのような仕草をしてから言った。

「……幼馴染のプレゼントなんだ」

「幼馴染……下校中に話した日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）っていう人？」

「うん」

雲取くんは懐かしい思い出を語るかのように呟いていった。

「俺ってさ、顔に少しコンプレックスがあるんだ」

「顔？」

「うん、皆にはなぜか好評だったんだけど俺はこの顔が嫌いだった。今でも嫌いだ」

雲取くんは本当に嫌そうな顔をしながら自分の頬つぺたを爪で引っ掻いていた。

「そんなときにさ、霞がこの眼鏡をわざわざ買ってくれたんだ」
そう言いながら、雲取くんは眼鏡を指差した。

「霞がコレを俺に渡しながら『コレならちよつと顔を隠すことができるんじゃない？』と言ってくれたんだ。最初は半信半疑だったんだけど、コレを着けて学校に登校してみたら周りが俺のことを気にしなくなったんだよ。あの時はちよつと嬉しかったなあ……」

雲取くんは天井を見ながら、感傷に浸っていた。

確かに雲取くんが今着けている眼鏡は大きくないとはいえ眼を覆うのには充分の代物だった。それに加えて雲取くんは前髪が長いのもはや顔を確認するのは困難な状態となっていた。

「それからかな、俺がこの眼鏡に依存し始めたのは。今では怖くてこの眼鏡を着けてないと会話するどころか眼も合わせられなくて困ったものだよ」

笑い事ではないはずなのに、なぜか雲取くんは笑っていた。

「……………苦労してるんだね」

「苦労なんてものじゃない。ただ逃げてるだけ」

「だろうね」

「厳しいや」

私たちは静かに笑った。笑える話でもないのに、何かを埋めようと必死に笑った。

「……………一つお願いがあるんだ」

急に雲取くんが真剣な顔に変わったので、私も真剣に聞いてみることにした。

「俺さ、頑張って眼鏡無しでも他人の顔を見れるようにしたいんだ。もうこの眼鏡から……………霞から卒業しないと」

だから、と雲取くんは続けて言った。

「俺と一緒に居て欲しい。そしていつの日か眼鏡を外した俺と視線を合わせて欲しい」

真っ直ぐと、眼鏡越しではあるものの私の目をハッキリと見ながら雲取くんは言った。

「……………それって愛の告白？」

私はその場を茶化すように言った。すると雲取くんは「俺変な事

言った？」と頭に「？」を浮かべながら考え、そして自分が何を言ったのか気付いて顔を真っ赤にさせた。

「い、いやいや違う！ 別に決してそういつつもりで言ったわけじゃないからっ！！」

「はいはい、どっちにしろ私は馬鹿が嫌いだから。貴方の頭が良くなるまでは一緒に居てあげるわよ」

私は手をヒラヒラとさせながら言った。

「とりあえず服着なさい。サッサと勉強するわよ」

私がそう言っていると、雲取くんは思い出したかのように脱衣所に向かっていった。

どうやら自分が上半身裸だということを忘れていたようだ。

その後、しばらく勉強をしてから雲取くんは帰っていった。

雲取くんが帰るときまだ少し雨が降っていたのもう少し小降りになってからにすれば良いのではないかと尋ねたら「どっちにしろ雨の中帰るつもりだったし家族が心配すると思うから」と言っですぐに出て行ってしまった。

私としては雲取くんと奈蔵（なくら）を遭遇させたくないの少し助かった。あの駄目弟だけは内緒にしておきたい。

「それにしてもコンプレックスか……」

私はそう呟いてから、雲取くんの顔を思い出した。

「奈蔵みたいにカッコいいわけじゃないけど……それでも良い方だと思っただけだなあ……」

私はそう呟いてから、リモコンを使って好きな番組にチャンネルを回した。

そのときの私はてっきり『雲取くんは顔が格好悪いからコンプレックスを感じている』と勘違いしていた。

雲取くんが覚悟を決めて私に本当の素顔を見せるまで、私はそう勘違いし続けたままだった……。

第2話 『顔立ち』 月夜見莉亜視点

「雨凄いなー」

私こと月夜見莉亜（つくよみりあ）は「ザア」と凄い勢いで振り続ける雨を見ながらボソリと呟いた。現在はとある理由によりクラスメイトの川苔（かわのり）の家で雨宿りをしている所だ。

「川苔ー！ 暇ー」

「暇なら帰ればいいじゃないか」

私が声をかけると、川苔は面倒くさそうな顔をしながら返事をしてきた。

「雨で帰れないから困ってるんじゃないかー。そんなんだから奈乃香（なのか）に振り向いてもらえないんだぞー」

「あ、赤久奈^{あかくな}さんは関係ないだろっ！？」

私が適当に嫌味を言うと、川苔は顔を赤くしながら叫んできた。分かりやすい奴だなー。

川苔が奈乃香……私の友達でもある赤久奈奈乃香に対して好意を向けているのは私の通っている高校では一般常識となっている。そして奈乃香が川苔に対して無関心なのは自然の摂理である。

ただ、私たちは眺めているだけだ。川苔が奈乃香に対して距離を縮めようとしている姿を「恋愛ドラマを観ている気分」程度に眺めている。

川苔を眺めていると、恋愛系のドラマが好きな人物の気持ちが少しだけ分かる。

「……何ニヤニヤしてんだよ気持ち悪い」

「べつつにー。それにしても今頃奈乃香は何して過ごしてるんだろっねー？」

「あ、赤久奈さんのことはどうでもいいし！？　べ、別に興味ねーしー！」

私がこうやってからかうと、川苔は決まって顔を赤くしながら否定してくる。その姿は何度見ても飽きない。

「それにしても川苔って凄いやねー」

「あん？　何が？」

「奈乃香のことを好きだからさ」

「だ、だから好きじゃねーよー！！」

今のは不可抗力である。決してからかおうと思って言ったわけじゃない。うん。

「それにしても人を好きになるってどういうことなんだろうね？」

「？　一体急にどうしたんだよ？」

「うーん、特に意味なんて無いよー」

私は地面に体を倒しながら言った。すると川苔は「おかしな奴だな」と笑いながら返事をしてくれた。

私の目の前にいる人物には、好きな人が居る。

たまに、それがとても羨ましく思えるときがある。

私には、好きな人がいないから……。

欲しいものが、何一つないから……。

「うーん……そろそろ帰るね」

私がそう言いながら立ち上がると、川苔は先ほどの態度から一変して驚きながら「え？」と呟いていた。

「いや、まだ雨凄しいもう少し止んでからにしたほうが……？」
「いいって、それにお兄ちゃんに怒られるからさー」
「……………そっか」

川苔はなぜか残念そうな顔をしながら言った。

「そんじゃ、傘貸すよ。気をつけて帰れよ」
「おう、川苔も気をつけて帰れよー」
「いやここが俺の家だし」

私は川苔からビニール傘を借りてせっせと出て行った。

雨は思っている以上に降っており、やっぱりもう少し止んでから川苔ん家（ち）を出て行けばよかったと何度か思ってしまった。それでも出てしまったものは仕方がないので、凄く強い雨の中を頑張って歩き続けた。

「……………ん？」

そして家に向かって歩いていると、同じ制服の男性が膝を床につけて必死に何かを探していた。

「眼鏡眼鏡……………」

まるでどこかの漫画のボケのように必死になって眼鏡を探していた。

どうしようか、と考えているところに、視界の端に一つの眼鏡を捉えた。

「あ、あのーすみません？　もしかして眼鏡ってコレですか？」

私は地面に落ちていた眼鏡を拾ってから男性に声をかけた。すると男性は涙と鼻水で顔を汚しながらこちらを振り向いてきた。

「お、俺の眼鏡ええええ!!」

男性は私が握っていた眼鏡を瞬時に掴んでは着用しようとしていた。だが着用しようとした瞬間に男性は眼鏡に異変を感じたのかマジマジと見詰め始めた。

「眼鏡のレンズが割れとる……」

男性の言葉に私は思わず「え？」と呟いてしまった。確かに良く見てみると眼鏡のレンズが割れていて着用すると危なそうだった。それに気付いた男性は肩をガクリと落としながら下に俯いてしまった。

「……まあレンズだったら変えればいいか。それより見つけてくれてありがとう。大切な物なんだ」

男性は深々と私に対してお礼を言ってきた。恥ずかしくなってきたので「別に平気だよー」と返事をしておいた。

「えっと……このお礼は今度機会が会ったらちゃんと返すよ」

男性は顔をタオルで拭き、私に向かって……正確に言うと私とは視線を合わせなかったのだが、それでもちゃんとした眼差しで言った。

「……ああ、やっぱり眼鏡がないと人の顔がちゃんと見れないな……
…ゴメン!!」

男性は意味不明なことを言いながら早々に立ち去ってしまった。去り際に顔を見たのだが恥ずかしかったのか顔が赤くなっていた。

「……変な人だなー」

私は笑いながら男性が立ち去っていった方向を見続けた。

「……それにしてもカツコ良かったなあ……」

私は小さく呟いてから、雨の中を家に向かって歩いていった。雨の音以外に、心臓の音がドキドキと鳴っていた。その音は、恋に落ちた音と似ている感じがした……。

間章 『定着した日々の勉強』 三人称視点

6月の何日。放課後の教室ではいつもどおり赤久奈奈乃香（あかぐななのか）と呼ばれる黒髪の少女は、雲取亘（くもとりわたる）と呼ばれる眼鏡を着用している校内一の馬鹿少年の勉強を見てあげている。

この勉強は、今ではお互いにとっては『朝起きたら顔を洗う』程度に習慣に身についており、片時もこの勉強の出来事を忘れたことはないだろう。

それゆえか、雲取の知識は日々上昇している。

「うん、この公式も完璧にマスターしたわね」

「うん、これも赤久奈さんのおかげだよ」

雲取がお礼の言葉を言うと、赤久奈は「雲取くんの實力だよ」と謙遜しながら照れた。

日々を重ねるごとに知識が増えていくので今の雲取はもはや学校一の馬鹿ではなくなっている。しかしそれを証明するためのシステムでもある定期考査は7月にある。それまで雲取の實力は明かされず、記録上では最下位となっている。

「いやー、早く定期考査が来て欲しいと思う日が来るだなんて思ってもいなかったよ」

コレが今の雲取の口癖だった。赤久奈に勉強を教えてもらうまで雲取にとって定期考査とは『自分の寿命を縮める首吊りの紐』という意味不明な認識をしていたのだが、今では小さな子供がゲームの発売日を楽しみにする感覚で待ち望んでいた。

「はは、まだ定期考査まで時間はあるよー」

赤久奈はそんな雲取の口癖に対して笑いながら返事をした。

「それまではしっかりと勉強して、いい成績を取ろうね」

「おう」

赤久奈が小さくガッツポーズをすると、雲取もそれに同調して小さくガッツポーズをした。

そしてその後は黙々と勉強をし続けた。

このとき、赤久奈は次の日もこうやって教室に残って勉強するのだろうと信じて疑わなかった。

だからこそ、翌日に雲取が学校を休んだときは驚きはしなかったものの戸惑ったのは無理もないだろう。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

6月の日頃。いつもどおり、私こと赤久奈奈乃香（あかぐななのか）は朝のHRが始まる前に自分の教室に入り席に着いた。

「おはよー奈乃香」

「おおおはよう赤久奈さんっ！」

席に座るなり友人の月夜見莉亜（つくよみりあ）こと莉亜と、川苔陽平（かわのりようへい）こと川苔くんの二人が挨拶をしてきたので、私も「おはよー」と返事をした。

そこで私はつい雲取（くもとり）くんの席を見てしまった。まだ登校していないのか、雲取くんの席には鞆すら見当たらなかった。

珍しいな、と私は思ってしまった。

雲取くんは以外と早起らしくて、勉強で分からない所を先生に質問するために早めに登校しているのだと前に聞いたことがあった。だから今日も早めに登校しているのかと思ったが、今日はそうでもなかったらしい。

「どうしたのー？」

莉亜が不思議そうな顔をしながら私のことを見てきたので私は「なんでもないよー」と適当に答えた。

そして学校のチャイムが鳴り響き、私たちのクラスの担任である長尾丸（ながおまる）先生が教室に入ってきた。

「あー……お前らサツサと座れー」

長尾丸先生はやる気無さそうに言った。

「やつべー」

莉亜と川苔くんはそう呟きながらそれぞれの席に座っていった。

「あー……えっと、これから朝の連絡を言うぞー」

長尾丸先生はやはりやる気無さそうに周囲を見渡し、全員が席に座ったのを確認すると同時に喋り始めた。

「えー……今日は雲取が休みだ」

「……………え？」

長尾丸先生が何のためらいもなく言った一言に、私は反応してしまった。

「なんでも風邪を引いたらしい。お前らも元気よく風邪引けよ。そうすれば学級閉鎖で休め……あー今のなし聞かなかったことにしろ。うん、子供は元気が一番」

さすが駄目教師ッ！ 自分が休むことしか頭に入っていないッ！

皆の心が一瞬だが一つになった気がした。
それにしても『元気よく風邪引けよ』はさすがに無いと思うよ長尾丸先生……。

……………それにしても雲取くん風邪か……。

私はそう思いながら、窓の外をジッと眺めていた。
今日は快晴だ。

そして時間は過ぎていき、放課後の時間となった。

「奈乃香、早く帰ろうー」

「うん、ちよつと待ってー」

私は鞆の中に筆記用具等といった道具を詰め込み、帰り支度を終えようとしていた。今日は雲取くんがいないので必然的に放課後の勉強会は休みになる。よって莉亜と一緒に帰れることになる。

「よし、準備オツケー。そんじゃ帰ろっか」

「うん、今日は帰りにパフェ買おうぜー」

私は莉亜とそんな世間話をしながら教室を出て行った。だが途中で長尾丸先生に「ああ、ちよつと待て」と肩を掴まれてしまった。

「？ なんですか先生？」

「あー……お前雲取の家がどこにあるのか知ってるよな？」

「？ ええ、知ってますよ」

長尾丸先生がそう質問してきたので、私はイエスと答えた。

「だったらこのプリントを渡しておいてくれないか？ 重要なプリントだからちゃんと届けて欲しいんだ」

長尾丸先生はそう言いながら私にプリントを押し付けてきた。

「えー！ そんなの先生が直接行けばいいじゃないか」

「先生は忙しいんだ」

私の横にいた莉亜が講義をしたが、長尾丸先生は軽く流した。

「そんなじゃ、頼むぞ」

長尾丸先生はそう言い残し、素早く去っていった。その姿はまさに『脱兎の如く』だった。

「まったく、別に急ぎじゃないんだから今日じゃなくてもいいじゃないか」

「そうだね、まあ先生の方にも用事があるんだから仕方がないよ」

横で文句を言っている莉亜に対して私は易しく言った。

「これじゃー今日はパフェは無しかなー？」

莉亜は少し残念そうな顔をしながら言った。

「ゴメンね、また今度時間を作るよ」

「いいって、別に奈乃香が悪いわけじゃないんだし」

私が謝ると、莉亜は全く気にした雰囲気を出さずに言ってくれた。

「そんなじゃ、サツサと雲取ん家（ち）に行きますか」

「うん」

そういう経緯で、私たちはパフェを食べるのを諦めて雲取くんの

家に向かうことになった。

そして下駄箱まで歩いていくと、今まさに革靴に履き替えていた川苔くんと本仁田（ほにた）くんと遭遇した。

「お、川苔に本仁田じゃないか。ヤッホー」

莉亜は二人の姿を視界に入れるなり、すぐさま声をかけた。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「あ、赤久奈（あかぐな）さんに月夜見（つくよみ）さんじゃないか」

「おお！ 赤久奈さん！！ ……げっ！？ 月夜見じゃん……」

本仁田（ほにた）くんと川苔（かわのり）くんもこちらに気がつき返事をしてくれた。なぜか川苔くんは莉亜を見るなり嫌そうな顔をしていた。

「おいっ、お前今明らかに『面倒くせー奴に出会っちゃまった』て顔したな川苔」

莉亜も川苔くんの嫌そうな顔に気が付いたのか文句を言った。

「実際に面倒な奴に出会っちゃまったんだからいいだろそれぐらい言っちゃって」

「なんだとー！？」

川苔くんが顔を逸らしながら言うと、莉亜は「ぶんすかつ」と怒りながらポカポカと可愛らしい擬音が聞こえそうなパンチを繰り返していた。

私はそんな二人を無視して本仁田くんと話すことに決めた。

「今から帰るところ？」

「おお、そのまま家に直ぐ帰るところだったよ」

「そう、今から雲取くんの家にお見舞いに行くんだけど本仁田くんはどうする？」

私がそう尋ねると、本仁田くんは「うゝん」とうねりながら考え始めた。

「ゴメン、今日是用事があるからパスするわ。雲取によく言っておいてくれない？」

「そう、わかったわ」

私がそう返事すると、本当に用事があったのか本仁田くんは「そんなじゃ」と言っただけにその場から立ち去ってしまった。

「だいたい川苔はチキンなんだよー！ そんなだから好きな子が振り向いてくれないんだぞー！」

「そ、それは関係ないだろ！？」

後ろを振り返ってみると、現在進行形で莉亜と川苔くんが口喧嘩を続けていた。

「ちよつといい加減にしなよ」

流石にそろそろ目立ちそうになってきたので、私は無理矢理二人の間に割って入り口喧嘩を強制的に止めさせた。

「ところでさ、川苔くんってこれから用事ある？」

「え？ あ、まあ用事はないけど……」

いきなり話題を振ってしまったためか、川苔くんは少しうろたえながら、それでもしつかりと答えてくれた。

「これから雲取くんの家にお見舞いに行くんだけどどうする？
一緒に行く？」

「あ、あーそういえば休んでたなアイツ。どうすっかなー……」

川苔くんは頭をポリポリと掻きながらどうするかを考えていた。そして何かに気付いたらしい表情をしながら私のことを真剣な目で見てきた。

「……赤久奈さんも一緒に行くのか？」

「？ まあ勿論行くわよ、先生に頼まれたし」

「だつたら行くぜっ！！」

川苔くんはなぜかテンションを高くしながら答えてくれた。

一緒に来てくれるのは嬉しいのだけれど、なぜそんなにテンションを上げるのだろうか？

「おやおやあ？ コレってもしかして私はお邪魔ですかなあ？」

なぜか莉亜は何か企んでいる顔をしながら私と川苔くんのことを見てきた。私が「どういう意味？」と尋ねようとしたらこれまたなぜか川苔くんが顔を赤くしながら叫び始めた。

「べ、別に邪魔じゃねーよっ！？ 赤久奈さんと一緒に帰れて嬉しいわけじゃねーしっ！？」

「あ、じゃあ私がいてもいいよねー。むっふっふー、残念だったねー川苔。せつかく奈乃香と二人っきりで帰れるチャンスを棒に振るなんてさー」

「だ、から違っつーの！？ 俺は雲取のことが心配なだけで赤久奈さんと一緒に帰れたかったわけじゃないっつーの！！」

「まあそういうことにしておこっかなー？」

莉亜は意味深な顔をしながら「ニヤハハー」と笑っていた。

……どうやらこの場で話に着いていけないのは私だけみたいだった。

私は二人の会話が終わるまで「？」を浮かべていた。

こうして、私と莉亜と川苔くんは現在進行形で雲取くんの家に向かって歩いていった。

時々、川苔くんが車道側に歩いてくれたり小石を除けてくれたりして「優しいんだなー」なんて思っていたが、流石に何回もやってもらうと「ウザいなー」なんて思ってきたりしてしまうのは仕方がないと思う。そもそも自分の周りをグルグル回られている時点でなんかウザかった。

「あ、そういえばここだっけかなー？」

「え？ 何が？」

突然、莉亜が道路の真ん中で立ち止まって呟き始めた。

「ここにすつごくカッコイイ男の子がいたんだよ。制服からしてウチの学校の生徒なんだろうけどとにかくカッコ良かったんだよな
ー」

莉亜が何の前触れもなくそう言うので、私は「へー」と相槌を打つしか出来なかった。興味がないと言えば嘘になるが、それでもあまり心がそえられることはなかった。

「そいつのバッジの色は？」

川苔くんは今の莉亜の話に興味を持ったのか質問していた。
私が通う山多摩（やまたま）高校の生徒は学年を分かりやすくす

るため胸に着けるバッジの色が学年ごとに違っている。

おそらく川苔くんは学年が分かればある程度誰なのか目星がつくだろうと考えたのだろう。

探す気満々だった。

「うーんと……そのとき雨だったからなー、確か銀色？ だったかなー？」

莉亜は少し迷いながら答えた。銀色というと私たちと同じ二年生を指していることになる。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「ん……俺たちと同じ学年でカツコイイ奴って沢山いるよな。
鹿倉（ししくら）とか向一とか川苔（かわのり）とか川苔とか川苔
とか……」

川苔くんは「うん」とうねりながら山多摩（やまたま）高校に
在学中のカツコイイ生徒の名前を言っていた。ただなぜか川苔く
んの名前が連呼していた気がするが、まあ気のせいだろう。言うほ
どカツコ良くないもん川苔くん。

「いや、多分違うと思うよ。私がこの間出会った人は眼鏡をかけ
てただけど……鹿倉くんと向つて眼鏡持っていないでしょ？」

川苔がある程度の名前を言い終えたのを見計らって（ちなみに川
苔くんは最後のほうは全部『川苔』と連呼していた）莉亜が思い出
したかのように言った。

「ふうん、そいつ眼鏡してんだ……んじゃあ違うか。そもそもを
言っちゃうと向の奴は眼鏡嫌いだしな」

川苔くんは「振り出しか……」と残念そうに呟きながらもう一度
カツコイイ人物を思い出していた。

そんなことをしているうちに雲取（くもとり）くんの家の前まで
辿り着いていた。

とりあえずその謎のカツコイイ人物の話はまた今度になった。

「へえ、結構良い所に住んでんだな」

「そうだね、コレは立派だ」

川苔くんと莉亜が口々に素晴らしいと言い始めた。

私も確かに素晴らしいと思っていたが、別に口に出してまで言うことではなかった。

実を言うと5月の間に私は一度だけ雲取くんの家に訪れていたのだ。住所を知っていたのもその為である。

そのときは妹さんがいないということで雲取くんの家で勉強することになったのだ。

ただ、それも一度きりの話でありそれ以来は訪れていなかった。それに雲取くんは結局のところリビングまでしか案内してくれなかったのであまり詳しくはなかった。

「ようし、インターホン押すよー」

私が懐かしい思い出に浸っていると。いつの間にか莉亜と川苔くんは玄関前に入っておりインターホンを押そうとしていた。

……相変わらず行動が早いな。

「なあ、一体誰が出ると思うよ？」

「んー、私は妹さんが出るに肉一枚」

「そんじゃ、俺はお姉さんが出るに肉一枚だ」

私が急いで玄関前に追いつくと、二人は暢気に賭け事をしていた。

「よし、その約束忘れるなよ？」

「望むところだ」

二人は互いに確認を取ってから、そして莉亜がインターホンを押した。

『ピンポン』というどこの家庭でも聞けるインターホンの音が

小さく聞こえ、間もなく『トコトコ』と家の中で誰かが歩いている
だろう音が小さく聞こえてきた。

『はい？ どちら様ですか？』

「あ、私は雲と……亘（わたる）くんのクラスメイトの赤久奈
乃香（あかぐなのか）と申します。お見舞いに来ました」

ドアの向こう側から声が聞こえてきたので、私はなるべく礼儀正
しく接した。一瞬「雲取くん」と言いそうになったが、よく考えた
らこのドアの向こうにいる誰かも「雲取さん」なので敢えて下の名
前を言った。

「私の名前はクラスメイトの月夜見莉亜（つくよみりあ）です
！」

「お、俺は先ほど名乗っていた赤久奈さんのクラスメイトの川苔
陽平（かわのりようへい）です！」

私の後ろにいた莉亜と川苔くんも自己紹介をした。

『……………』

なぜか沈黙がその場を支配した。

てつきり“ドアを開けてもいい”という示唆なのかと思ってドア
ノブを掴んでみたが、やはりというか開く気配がなかった。

「あ、あのー！ 私は亘（わたる）くんのクラスメイトの赤久奈
奈乃香と言います！ お見舞いに来ました！」

私は念のため今度は大きな声で言った。
そして数秒後に返事が返ってきた。

『…………証拠』

「え？」

『お兄ちゃんのクラスメイトだという証拠を言ってください』

「……」

ドアの向こう側にいる誰かの返事を聞いて、私は勿論後ろにいた莉亜と川苔くんも「コイツ面倒くせー」という顔をした。

「……おい、とりあえずそのお兄ちゃんに関係のあることを言えばいいのか？」

川苔くんが確認のため質問すると、数秒後に『はい』と今にも消え入りそうな声で返事が返ってきた。

「なんか用心深いというか面倒くさい子だね」

莉亜は苦笑いをしながら言った。

「まあ雲取に関係あることを適当に言えればいいんだろ？ とつと言っちまおうぜ？ そしてお姉さんだったら肉だぞ莉亜？」

「それはこっちの台詞だよ川苔？ もし妹さんだったら肉だよ？」

川苔くんと莉亜は再び確認するように言った。

というより本当に賭け事をする気なのだろうかこの二人は？

「そんじゃ、言っぞ」

川苔くんの合図と共に、私たちは息を静かに吸い、そして吐き出

すように言った。

「雲取くんは数学のテストで赤点以外取ったことがない」

「雲取の好きな教科は古典」

「雲取の好物はオムライス」

順に私、莉亜、川苔くんである。

……言った後から気付いたけど流石にコレだけの情報量じゃ証拠にならないよね、うん。

仕方がないのでもう一度ちゃんと証拠になりそうな事を言って

ガチャッ。

ドアの鍵が開く音が聞こえてきた。

……本当に用心深いのか面倒くさいのか、それとも適当なのか分からない門番である。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

ドアが開き、家の中から可愛らしい黒髪ポニーテールの女の子が現れてきた。

「……こ、こんにちは」

「こんにちは」

ポニーテールの女の子が少し躊躇いながらも挨拶をしてきたので、私はニツコリと笑いながら返事をした。

「よし！ 妹確定だね！」

「ま、待てよ！？ まだ妹だと決まってねえ！？ 非実在青少年かもしれないぞ！？」

「そんなのいるわけねえ」

後ろではまだ莉亜（かわのりりあ）と川苔（かわのり）くんが賭け事をしていて。諦めが悪い川苔くん。

「えつと……亘（わたる）くんの妹さんかな？」

「はい、妹の雲取三花（くもとりみつか）と言います」

私が優しく質問すると、三花と名乗ったポニーテールの女の子が答えてくれた。私の後ろで「そんな馬鹿な……」とか「いやっほーい！」とうるさい声が聞こえてきたがとりあえず無視しておいた。

「これ、亘くんに渡しておいてくれないかな？」

私は鞆の中から長尾丸（ながおまる）先生に頼まれていたプリン

トを取り出して三花ちゃんに渡した。

「ありがとうございます。……あの、もしよかったらお兄ちゃんに少し会っていきますか？」

「え？ いいの？」

私が尋ねると、三花ちゃんは「はい」と答えてくれた。

「んじゃ、お邪魔するね。……二人ともいい加減にしなよ」

なぜか取っ組み合いになっていた莉亜と川苔くんの頭をコツンツと叩いて雲取くんの家に入っていた。

そして順に三花ちゃん、私、莉亜と家の中に入っていく、残った川苔くんも家の中に入ろうとした。

「あ、ちょっと待ってください」

ちょうど川苔くんが入ろうとした瞬間、なぜか三花ちゃんは呼び止めていた。

「ん？ 俺がどうかしたの？」

「貴方は入っちゃ駄目です」

「え？ なぜ？」

「お兄ちゃんの好物はオムライスじゃなくて私が作ったハンバーグです」

三花ちゃんはそう言って、何の躊躇いもなくドアと閉じ鍵をかけた。

「え？ いやちょっと待ってよさっきのあれの事！？ いやでも

さ、アイツこの間『俺ってオムライス好きなんだよねー、でも卵割るとヒヨコさん死んじゃうから食べれないんだよねー？』って言うってただけど！？」

川苔くんが必死になって弁論していた。つというより可愛いな雲取くん。意外とピユアだな。でも『卵割るとヒヨコさん死んじゃうから食べれないんだよねー？』はハツキリ言っただけキモい。「お前は女子か！？どこで女子力を溜めてたんだ！？」と突っ込みたくなってきた。

「お、お兄ちゃんはこの間『三花が作ったハンバーグは美味しいなあ、宇宙一だよ』って褒めてくれたもん！」

三花ちゃんはずいぶん顔を赤らめがならドアの向こう側にいる川苔くんに対して叫んだ。うん、多分それはお世辞だよ三花ちゃん。

「他にお兄ちゃんの知っていることを言えば開けますよ」

「うーん……知ってることってもうないんだけど……」

ドアの向こう側にいるので確認できないが、時折「うーん……」とうねっている声が聞こえてくるのでどうやら考えるだけ考えているらしい。

「雲取のエロ本の隠し場所はベッドの下」

……聞いた後から気付いたけど流石にソレだけの情報量じゃ証拠にならないよね、うん。というより三花ちゃんがそんなこと知っているわけじゃない川苔の馬鹿。

仕方がないのもう一度ちゃんと証拠になりそうな事を言わせて

ガチャッ。

ドアの鍵が開く音が聞こえてきた。

……本当に用心深いのか面倒くさいのか、それとも適当なのか分からない門番である。

いや、それ以前になんで雲取くんのエロ本の隠し場所知ってるの三花ちゃん！？

「……なんでお兄ちゃんのエロ本の隠し場所を知っているんですか？」

三花ちゃんが驚いたというより疑惑の眼差しで川苔くんのことを見つめた。

「いや、この間教えてもらったから……？」

川苔くんは少しうろたえながら、眼を泳がせながら答えた。この様子だと当てずっぽうで言ったようだ。そもそもを言っちゃうとベツドの下にエロ本隠すのって王道過ぎて逆に誰もやらないもんね、多分。

「そう……まあ知ってたから一応通す」

三花ちゃんは少し偉そうな態度をとりながらドアを開けて川苔くんを家の中に入れてあげた。

「……お兄ちゃんは、妹物のエロ本を買ってくれないんです……」

三花ちゃんは少し寂しそうな雰囲気醸し出しながらボソリと呟いた。

……いや、いくらなんでもリアル妹がいるのに妹物のエロ本は買えないでしょう。

「ムッフッフー。これは部屋に入ってから楽しみが出来ましたなー」

莉亜が少し悪そうな顔をしながら言った。探す気満々である。

「それにしてもアイツってエロ本買うんだ……ちょっと以外」

川苔くんは少し拍子抜けした顔をしながら言った。確かに川苔くんの言うとおり雲取くんってエロ本とか買ってそうなイメージが無かったのでちょっと意外性を感じた。

「人は見かけによらないってことね……」

私も少し顔を熱くさせながら呟いた。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「それではお兄ちゃんの部屋に案内しますね。着いてきてください」

三花（みつか）ちゃんはそう言うところそくさと階段を上り始めた。私たちもその後を着いていった。

「ここがお兄ちゃんの部屋です」

階段を上つてすぐ近くに雲取（くもとり）くんの部屋があった。三花ちゃんは雲取くんの部屋の前に近づいてドアを「コンコンッ」とノックした。するとドアの向こう側から「はい」と今にも消え入りそうな弱弱い雲取くんの声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃんと同じクラスの女性が二人と変な男一人がお見舞いに来てくれたよー」

「ちょ、変な奴って俺のことかよ!？」

「あー、どうぞ」

三花ちゃんは川苔（かわのり）くんの突っ込みを無視してドアを開けた。

部屋の中は意外と整理されており生活感を漂わせていた。青色が好きなのか全体的に青い物が多く置かれていた。

「えっと……ああ、赤久奈（あかぐな）さんと月夜見（つくよみ）さんに川苔くん。わざわざお見舞いに来てくれてありがとう」

ベッドの上には雲取くんが顔を赤くさせながら横になっていた。

お世辞にもあまり顔色が良いとは言えなかった。それでもなぜか眼鏡だけはしっかりと着用していた。

「それじゃ、私は失礼します」

三花ちゃんは私たちにそう言ってから部屋を出てドアを閉じた。私たちに気を使ってくれたのかもしれない。小さいのに出来た子だ。

「えっと……なんて言えばいいのかな？　あまり友達が家に来るのには慣れて無くてさ、はは」

雲取くんは少し笑いながら言った。その表情は少し嬉しそうにも見えた。

「な、なあ雲取……体調はどうなんだ？」

「ああ、ちょっと風邪を拗らせたただだから大丈夫だよ。明日には学校に行ける」

川苔くんが心配そうに質問するも、雲取くんは本当に大丈夫そうに笑いながら言ってくれた。

「そう、よかった……」

少なくとも笑えるってことは心に余裕があるということだ。私も雲取くんの笑顔を見て少し落ち着いた。

「ところで何か急ぎの用事でもあるの？　普通だったら一日休んだぐらいで見舞いに来ないよね？」

雲取くんはどこか不思議な表情を含ませながら言った。そうだ、

当初の目的を達成させなければここに来た意味が無い。

「長尾丸（ながおまる）先生にプリントを渡すように頼まれていたのよ」

「雲取のベッドの下にあるエロ本を物色するために来たんだよー」

「まあ暇つぶし？」

順に私、莉亜、川苔くんと言った。

……言っただけいいがなぜこつも見事に目的が別れているのだろうか？ 私たちは一つの目的を共有してここまで来たはずなのにどこで過ちを犯してしまったのだろうか？

「ちよつと待って月夜見さん、なんで俺のベッドの下にエロ本があることを知ってるの？」

よりもよつて雲取くんは莉亜の言葉に反応した。……本当にベッドの下エロ本隠してんのかよ？

「いや、さっき三花ちゃんがそう言ってたよ？」

「……あの野郎また勝手に見ていきやがったな……！」

雲取くんがコレまで見せたことが無い鬼の形相をしていた。思わず「ビクリッ」と驚いてしまった。

「ってなわけで拝見するよー」

莉亜はそんな雲取くんのことを華麗に無視して何の躊躇いもなくベッドの下に手を伸ばした。

「お、発見！ どれどれ……？」

「わーっ！？ 読んでんじゃねえよっ！？」

莉亜が本を片手に握り読み始めようとした瞬間、雲取くんは元々赤い顔をさらに真っ赤にさせながら本を奪い取っては布団の中に隠していった。

「えー？ いいじゃーん別に減るもんじゃないしー？」

「は、恥ずかしいんだよこっちは！？」

莉亜は「ぶーぶー」と言いながら講義したが、雲取くんは顔を真っ赤にさせながら反論してきた。

……私も雲取くんがどんなエロ本を読んでいるのかちょっと気になるんだけどな……。

「ふむふむ、お前って意外と年上が好みなんだな」

川苔くんが突然独り言を言い始めたので何事かと振り向いてみると、いつの間にかゆっくりとエロ本を読んでいた。

「あーっ！？ そ、それは勘弁してくれー！？」

「おーい月夜見、読むか？」

「読む読むー」

「回してんじゃねえよっ！？」

雲取くんはとても病人とは思えない動きを繰り返して川苔くんの手からエロ本を奪い取ってはすぐさま先ほどのエロ本同様布団の中に隠していった。

「ふっ、まあお前が巨乳好きだという事実は隠しといてやるよ。男と男の約束だ」

「女子がいる前で言っちゃってるよ川苔くん!？」

雲取くんの言うとおり、川苔くんが言った『男の約束』は私と莉亜の耳の中にしっかりと刻まれた。

「……………雲取くんって巨乳が好きなんだ」

そして私は自分の平らな胸を眺めた。

……………少し泣きそうになった。

第3話? 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

その後、適当に駄弁つてしているとドアが「コンコンッ」と鳴った。

「お兄ちゃん、入っても平気?」

「おお、いいぞー」

雲取（くもとり）くんがそう言つと、ドアが開いて三花（みつか）ちゃんが部屋に入ってきた。

「これ、リンゴ剥けたよ」

三花ちゃんは両手で皿を持ちながら雲取くんに突きつけるかのように見せた。皿の上には皮が綺麗に剥けられ何等分かに分けられているリンゴが置いてあった。

「へえ、上手だね。三花ちゃんが剥いたの?」

「は、はい……」

私がリンゴを見ながら褒めると、三花ちゃんは可愛らしく顔を紅潮させた。

「皆さんの分もあるからどうぞ」

三花ちゃんはそう言いながらリンゴが乗っかっている皿を机の上に置いた。

「え? 私たちも食べていいの?」

「はい、少し多めに剥いてきたので大丈夫ですよ」

私が素朴な質問をすると、三花ちゃんは笑いながら答えてくれた。

「いやー、でもやっぱ果物は病人が食うべきものであつて私たちが食うべきものじゃないと思うんだよねー」

莉亜（りあ）は「ムシヤムシヤ」とリンゴを齧りながら言った。

……既にリンゴを食べている時点で説得力ないよ。

「おい月夜見（つくよみ）。ここは雲取の家なんだからもつと礼儀を知れよ。このリンゴを先に食べて良いのは雲取だぞ？」

川苔（かわのり）くんも「ムシヤムシヤ」とリンゴを齧りながら言った。

……だからリンゴを食べている時点で説得力ねえつつうの。

「川苔だつて食べてんじゃん」

「お前が食つたから食っているんだ。お前が食つてなかったら俺も食つてなかった」

「あー、男の癖に酷い言い訳ー。人のせいにすんなよー」

「元はと言えばお前が先にリンゴを食べたのが悪いんだろっか？」

二人は口にリンゴを銜えながら口喧嘩をし始めた。二人の喧嘩がヒートアップする度にリンゴはどんどんと減っていく。

なんだこいつらは？ リンゴという栄養を摂取しないと喧嘩できないのか？ いや、この場合はリンゴがあるから喧嘩が起きてしまったのだろっ。そもそもこのリンゴは三花ちゃんが雲取くんのために剥いてきたものであつて私たちの物ではないということをお分かっているのだろっか？

「あ……」

三花ちゃんが眩きを漏らしていた。無理もないだろう。なにせ沢山あったリンゴがこの馬鹿二人のせいで跡形も無く消え去ってしまったのだから。

「だいたいお前は」

「それにしてもアンタは」

川苔くんと莉亜は次のリンゴを口に含もつと皿に手を伸ばした。そこでやつとのことで自分たちだけでリンゴを食っていたことに気がついたらしい。

「……………」

二人ともなにか気まずそうにしながら沈黙。それも当然だろう、なんせ雲取くんが食べるはずのリンゴを全て自分たちで食べつくしてしまったのだから気まずい程度じゃないだろう。

「えつとその……すみません」

川苔くんと莉亜は一斉に土下座した。

「あ、あの……もう一度剥いてきますから大丈夫ですよ」

三花ちゃんはそう言いながら空になった皿を掴んで部屋を出て行くとした。

「ま、待つて三花ちゃん!? 私たちもリンゴ剥くの手伝うよ!」
「そ、そうだ! 元々は俺たちが悪いんだ! それぐらいはさせてくれ!」

「え、いやでもお客様だし悪いですよ……」

莉亜と川苔くんは自分の罪滅ぼしのためか三花ちゃんと一緒にリンゴを剥こうと部屋に出て行こうとしていたが、三花ちゃんはそれを拒否した。

「い、いやでも本来は雲取が食べるはずだったリンゴを俺たちだけで食っちゃったのも一つの事実だし、やっぱ俺たちが働かないとな！」

「そ、そうだよ！　むしろ三花ちゃんはここで待っていてくれてもいいぐらいだよ！」

川苔くんと莉亜はそれでも一步引かなかった。その二人を見て三花ちゃんは「一体どうすればいいのだろうか？」と言いたげな顔をしながら困っていた。

「三花、俺ちよつとお粥が食いたいな。悪いけど月夜見さんと川苔くんに手伝ってもらいながら作ってくれないか？」

私が二人に対して「いい加減にしなよ」と言おうとした瞬間、雲取くんがお腹を擦りながら三花ちゃんに対して言った。

「……お兄ちゃんがそう言うんだったら」

三花ちゃんは何で顔を赤くさせながらモジモジと何か呟いた。

「えっと……月夜見さんに川苔さんでしたっけ？　その、一緒にお粥を作ってくださいますか？」

三花ちゃんが少し恥ずかしそうに言うと、二人は「オーケイオー

「ケイ！」と叫びながら了承した。

「よし、そんじゃ早速台所に行こっか」

莉亜が二花ちゃんの小さい手を握りながらそのまま部屋を出て行った。川苔くんもその後が続く形で部屋を出て行った。

「さすがお兄ちゃん。妹の扱い方を心得ているね」

私がそう茶化すと、雲取くんは「そうでもないよ」と謙遜してき
た。

第3話? 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「……………本当にありがとうね」

「ん? なにが?」

雲取（くもとり）くんが急にお礼を言ってきた。だが何に對して言ったのか分からなかったため私の返事は質問形となってしまうた。

「お見舞いのことだよ」

「ああ、別に良いのに」

私は手をブラブラさせながら適当に言った。

「……………今二人きりだから聞くんだけどさ、赤久奈（あかぐな）さんは好きな人とかいるの?」

「ッ!? ゲホゲホッ!」

雲取くんが突然にも程があることを急に言ったため、私は咳き込んでしまった。

「い、いきなりなに变なことを言うのよ!」

「うーん……………何と無く」

「何と無くってどういう意味よ…………?」

雲取くんは本当に何と無く……………何の考えもなしに言ったようだとぼけた顔をしていた。その顔を見ていたらなんだか取り乱して咳き込んでしまった自分が馬鹿馬鹿しく思えてきた。こういう恋愛話にも免疫をつけないといけないかもしれない。

「んー……好きな人はいないわね。私そついうの苦手だから」
「わあ、以外だ。赤久奈さんだったら誰か好きな人がいると思つてたよ」

私の返事を聞いた雲取くんは少し驚いていた。

「私そついう恋愛感情つて苦手なのよねー。友愛と恋愛の違いがよく分かんないのよ」

私は頬を掻きながら言つた。

実際に、私は生まれてからずっと勉強しかしていなかったため恋愛感情には乏しかった。友達がよく「私　くんのことが好きなのー」とか笑いながら話しているが、そのときだけ私は会話の流れを掴むことができなかった。

「ふうん、赤久奈さんでも分からないことつてあるんだ」

雲取くんは少し意外そうな顔をしながら呟いていた。

「そついう雲取くんは好きな人がいるの？」

逆に私は雲取くんに対して質問した。雲取くんのほうから話題を振つてきたのである程度好きな人がいるのは間違いないだろう。

「いんや、特には」

だから雲取くんがこつ答えたとき、私は純粹に驚いた。

「自分から話題振つておいてそれはないんじゃないのかなー？」
「えー……。だつて好きな人とかいないもん」

試しに茶化してみるが、本当に好きな人がいないのか雲取くんは「うつむ……」とうねり始めてしまった。

「あ！ この間雨に日に話していた日向沢ノ峰霞（ひなたさわの）みねかすみ）っていう人はどうなの？」

私は突然頭に思い浮かんだ、この間雲取くんが話していた幼馴染の名前を挙げてみた。

私としては軽いノリで言っただつもりだった。

だからこそ、雲取くんが急に珠のような汗を流し始めたことに驚いた。

「ちょ、雲取くん！？ 大丈夫！？」

私は雲取くんの額に浮かんでいる汗を見て声をかけた。体調が悪いのかと思ったけど雲取くんは「大丈夫だから」と言いながら近くに置いてあったタオルで汗を拭いた。

「それにしても霞か……確かに好きかもしれないね」

雲取くんは一通り汗を拭いてから私の質問に答えてくれた。

雲取くんがその霞っていう人に対して「好き」だと言った瞬間、なぜか私の胸がチクリと痛くなったのを感じた。

奇妙に思いながら胸を触ってみるが特に何も無い。気のせいだろうか？

「だ、だったら付き合っちゃえば？」

そして私はなぜかそんなことを言っていた。なぜかそう言いたい

気分になっていた。

「ただ俺には霞を好きになっちゃいけない理由があるから……」

「理由って？」

「ゴメン、これもこの間同様口止めされてる……んだけどたとえば口止めされていなくても言っていなかったと思うよ」

雲取くんは少し表情を曇らせながら、それでも言った。

「それじゃ、もしその理由が無かったら付き合ってたの？」

「……………」

私はまるで攻めるかのように雲取くんに言い放ってしまった。これは不味いと自分で思いすぐに謝ろうと思ったが、雲取くんは沈黙しながらもなぜか穏やかな顔をしながら私のことを見ていた。

「……………そうだね、別に理由が無くても付き合わなかったかもしれないね」

雲取くんは私が何を言いたいのか察しているかのように言った。

「幼馴染ってというのは距離が近すぎる分恋愛感情ってのが曖昧になるんだよねー。結局、俺は勿論きつと霞も俺のことを好きだったんだけど付き合おうとは思っていないよ。今頃霞は誰かと付き合っているに違いないよ」

「……………それってなんだか悲しくない？ 例え付き合おうと思わなかったとしても、自分が好きだった子が他の男の子に取られるのって、どういう気分なの？」

「……………ちょっと、寂しかった」

雲取くんは、そうは言ったもののなぜかちつとも寂しそうな顔を
していなかった。むしろ清らしい顔だった。だが別に嘘を吐いてい
るわけではないと感じた。本当に寂しいと思っっているのだが、それ
以上に別の感情が勝っているのだろう。

「でもさ、霞の幸せは霞の物であり、霞の自由だ。俺の我侭で奪
い取っていいものではない」

雲取くんは本当にその霞さんの幸せを祝福しているかのように言
った。きっと、寂しいと感じる以上に嬉しいと感じているのだろう。

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点（後書き）

一応書いておきますが、日向沢ノ峰霞というのは『第2話？』顔立ち』で名前だけ出た人物です

第3話？ 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「俺はまだ、恋愛感情を知らない子供だから」

雲取（くもとり）くんは笑いながら言った。

恋愛感情を知らない子供。

その言葉に、私は同意というより同調してしまった。
私も、きつと恋愛感情を知らない子供だから。
なんだか、雲取くんと私は似ている気がした。

「……私も、恋愛感情を知らない」

だから私も、自分の気持ちを言葉として吐き出した。

「……似てるね、俺たちって」

雲取くんが私の考えていることをまるで見通しているかのように
言ってくれたとき、私は少し嬉しかった。

仲間がいることに対して、ちよつと嬉しくなった。

「おい、リング剥いてきたよー」

「お粥もこの通り完璧なものを作ってきたぞ」

突然、何の前触れも無くドアが開かれ莉亜（かわのりりあ）と川苔（かわがみ）くん
の二人がズカズカと部屋に入ってきた。別に驚く理由は無いのだが、
いきなり二人が部屋に入ってきたためか私は反射的にビクリッと体
を硬直させてしまった。

「いやー、川苔の馬鹿がさ『お粥って米使うっけ？』って突然馬

鹿な発言してくるから笑っちゃったよワラワラ」

「な！？ それだったら月夜見（つくよみ）だってリンゴを剥くとき失敗して芯しか残らなくて結局全部三花（みつか）ちゃんにまかせてたじゃねーかよゲラゲラ」

「なんだとー！？ 笑ってんじゃねーぞ！？」

「お前が先に笑ったんだろぅが！？」

部屋に入って来るなり莉亜と川苔くんは再び喧嘩を始めてしまった。またリンゴを食べられたら迷惑なので私は二人から奪い取るようにリンゴが乗った皿とお粥を掴んでは雲取くんに渡した。

「ありがとう」

「どういたしまして」

雲取くんの屈託のない笑顔に、私は屈託のない笑顔で返事をした。

「それにしても二人とも仲良いね」

「そう？ 私には喧嘩しているようにしか見えないけど？」

「喧嘩するほど仲が良いって言うでしょ？」

「……まさか雲取くんに言葉を教えられる日が来るとは思わなかったよ。」

雲取くんは「日頃のお礼だよ」と言いながら笑った。その笑い声を聞きながら私は莉亜と川苔くんの口喧嘩を遠くから眺めた。

赤の他人から見ればただ仲が悪いように聞こえるが、やはり仲の良い私から見ても仲が悪いようにしか見えなかった。

「食べる？」

雲取くんはそう言いながら私にリンゴが乗った皿を向けた。私は

勿論遠慮したのだが雲取くんが「いいからいいから」と無駄に勧めてくるので仕方なく一つだけ貰うことに決めた。

「美味しい？」

「美味しい」

雲取くんの質問に私は雲取くんの言葉を引用し、『はてなマーク』を抜いて自分用にアレンジして返事をした。

そのとき食べたリンゴの味は、甘く、口の上でとろけそうだった。

その後、莉亜と川苔くんは口喧嘩に疲れたのか静かになっていた。まるで喧嘩などしていなかったかのように大人しかったのである意味不気味さを覚えた。

「そういえば二人っきりで何してたの？」

莉亜が何の脈絡も無くそう言った。

「特に何もしてないけど？」

「うつそだー、年頃の異性が二人きりなんだからエロエロイベントぐらいは起きてるでしょー？」

私は真実ありのままを答えたが、莉亜は「このこのー」と肘で私の体を突きながら失礼なことを言い始めた。いくら雲取くんでも私のような可愛くない女の子には興味が無いだろうに。

「……おい雲取？　もしかしてやったのか？」

「や、やってないって！」

川苔くんが雲取くんを睨みながら質問……というより尋問していた。雲取くんが真剣な眼差しで答えたのが効いたのか「ま、お前にはそんな度胸もねえよな」と納得して穏やかな眼に戻った。

「んじゃあ、何話してたの？」

莉亜は興味心身に聞いてきた。別にそんな面白いことは話してないんだけどな……。――

「俺と赤久奈（あかぐな）さんって似てるよねーって話してたよ」

「雲取くんそれは失礼だよ」

「おう、それは赤久奈さんに対して失礼だ。万死に値する」

「そこまで言う！？　というより俺と似ているってそこまで不名誉なの！？」

雲取くんが言った瞬間、莉亜と川苔くんは一斉に罵倒した。

……似てるのは事実なんだけどな！。

第3話? 『訪問』 赤久奈奈乃香視点

「あ、そろそろ帰らないと」

突然、莉亜（りあ）が携帯電話を開いて呟いた。私も釣られて携帯電話を開いて時刻を確認すると、もうそろそろ晩御飯の時間になりかけていた。

「それじゃ、この辺で解散にしましょうか」

私がそう言うと、莉亜と川苔（かわのり）くんも「うん」と頷いてから一斉に立ち上がった。

「今日はありがとうね」

雲取（くもとり）くんは私たちを見上げながら言った。

「別に暇だったからいいよ」

「早く治して学校に来るんだぞー?」

川苔くんと莉亜が各々好き勝手なことを言ってから先に部屋を出て行った。私も二人の後を追うように出て行こうとしたが、雲取くんに「ちよつと待って」と呼び止められたので立ち止まった。

「奈乃香（なのか）ー? どうしたのー?」

「ごめーん! 先に行つてー!」

声をかけてくれた莉亜にそう返事をする、莉亜は特に理由も聞かずに「んー、分かったー」と言ってから先に出て行ってくれた。

「で、何の用なの？」

私は雲取くんと向かい合う形で言った。

「さっきの続き」

「さっき……？ ああ、あの恋愛話？」

私が心当たりのあることを適当に言うと、雲取くんは「そう、それ」と同意してくれた。

「赤久奈（あかぐな）さんは、もしどこかの誰かに告白されたら交際するつもりなの？」

雲取くんは、まるで私が困ると分かっているが、まるで私を困らせるように、何の前触れも無く当然と、そして毅然とした声で言った。言ったというより囁くと言ったほうが正しいくらいその声は澄んでいた。

勿論、私は困った。

私が先ほど「恋愛感情を知らない」と言ったにも関わらず、雲取くんはそんな質問してきた。

それは、ただちに私の困った顔を見たいのか、それとも真剣に聞いているのか、それは雲取くん自身にしか分からないだろう。

ちなみに言うておくが、私は雲取くんの質問に答えられない。

もしかしたら告白されたら交際するかもしれないし、交際しないかもしれない。

その時の気分にもよるだろう。もしかしたら顔で決めるかもしれない。

だから私は、私自身の気持ちではなく、それでも自身ありげに茶化すように言った。

「私がそんなに軽い女に見えるかしら」

「いや、見えないよ。だから確かめたくなった」

雲取くんはまるで謝るかのように「ごめんね」と言っ頭を下げて。私は「別にいいわよ」と言っおいた。

「呼び止めてごめんね。用事はそれだけだよ」

「そう、それじゃ、また後日学校で勉強しましょ」

「うん、その時もご指導お願いしますよ」

私と雲取くんはお互いに「ばいばい」と言っ、そして私は今度こそ部屋を出て行った。

「奈乃香遅い」

「ゴメンゴメン」

雲取くんの家を出るなり、莉亜は退屈だと言わんばかりの表情をしなが言った。

……確かに待たせた私も悪いけど、それでも5分ぐらいしか待たせてないんだけどなー。

「よし！ そんじゃ、帰りましょっか！」

莉亜はなぜか元気な声を出しながら叫んだ。

「まあ残念なことに、俺と月夜見（つくよみ）は帰る方向が同じだけど赤久奈さんは逆方向なんだよなー」

「はっはっは、私を送ってもいいのだぞ川苔？」

「……なんでコイツと帰る方向が同じなんだよ……？ 俺は赤久奈さんと帰りたいのによ……」

川苔くんはなぜかブツブツと言いながら（内容はあまり聞き取れなかった）莉亜のことを睨んでいた。莉亜は睨まれているにも関わらず「まあ気にすんなや」と軽く流していた。

「そんじゃばいばい」

「じゃーなー赤久奈さん」

莉亜と川苔くんは手を振りながら帰り道を歩いていった。

「うん、また明日学校でねー」

だから私も手を振ってから二人とは反対方向の道を歩いていった。空はもうそろそろ沈みかけていて、赤い夕日が眩しかった。

「今日の晩御飯は何にしようかなー？ いや、お母さんが作ってくれているかなー？」

私はご飯のことを考えながら家に向かって歩いていた。

「あ、ちよつといいですかー？」

「？ はい、なんでしょう？」

突然、前のほうから歩いてやってきた女性が声をかけてきたので、私は立ち止まった。

女性の外見は金髪で最初は外国人かと思われたが、目の色が黒かったのでおそらく金髪に染めただけの日本人なのだろうと勝手な推

測をした。

それにしてもとても綺麗な、まるでモデルとかをやったそうな人だなー、と思わせるぐらい美しかった。

「えつとー、この辺で雲取って名前の家があると思うんだけど知らない？」

女性は初対面にも関わらず軽い口調で話しかけてきた。まあ同世代に見えるし、私としては変に敬語で話されても微妙な気持ちになってしまうのでむしろ女性の口調を聞いていると気が楽になって助かった。

「ええ、雲取くんの家ならアッチのほうですよ」

私は後ろを向いて雲取くんの家があるほうを指差した。

「……貴方、わーくんの知り合いなの？」

「わーくん」？

女性が突然私が聞き覚えの無い単語を言ってきたのでつい復唱してしまっただが、女性は「なんでもないわ」と急に黙り込んでしまった。

「そんなことより教えてくれてありがとう。助かったわ、この辺って迷いやすいのよねー」

女性は私が喋る間も与えずにペラペラと言いたいことを言っただけで、「それじゃ」と立ち去ってしまった。

「変な人だなー」

私は女性が消え去ったのを確認してから呟いてしまった。

「……もしかしたら雲取くんはああいう人が好きなのかもしれないよね」

私は先ほどの女性の外見を思い出していた。女の私でさえ惚れてしまいそうな顔立ちだった。私は地味な顔立ちのため、とても羨ましかった。

「……私も可愛くなるように努力したほうがいいのか……？」

私は夕日に向かって、ボソッと呟いた。

第3話 『訪問』 ???視点

あたしは先ほど綺麗な黒髪を持った女性に教えられた家に辿り着いていた。

家名を確認してみたが、確かに「雲取家」と書かれてあった。

「ここがわーくんの家……」

あたしは確かめるかのように呟いた。

わーくん……雲取亘は果たしてあたしのことを覚えてくれるのだろうか？

あたしの心の中はそれだけで一杯だった。

もしかしたらあたしだって気付いてくれないかもしれない。

いや、気付いてくれないだろう。

あたしはそう確信してしまった。

あたしは数年前と比べたら髪の毛も染めてるし体も痩せた。この間中学生時代の女の子の友達に久しぶりに出会ったときには「うわー、気付かなかったよ」と驚かれてしまった。最初は冗談の類だと思っていたが、遠慮がちだったところを見ると本当にあたしだと気付いてくれなかったようだ。その時は少しショックだった。

あたしは勇気を出してインターホンを押そうとしたが、途中で止めた。

確かにわーちゃんと会いたかった。だけどそれ以上に「え？ 誰お前？」と言われるかもしれないという不安があたしのことを襲ってきた。

そして結局、あたしはわーちゃんと再会することを諦めた。どうやらあたしには、幼馴染と出会う程度の勇気さえ無かったよ

うだ。

“あの仕事”をしてからは自分にちょっと自身が持っていたが、結局何も変わっていなかったようだ。

唯一変わったのは外見だけだ。

「……はは、駄目だなーあたし」

あたしは自虐的に笑った。虚しくなってきた。

……なんで黒髪の女性に話しかける勇氣はあるのに、幼馴染のわーくんに話しかける勇氣は無いのだろうか？ と思っってしまった。

そしてあたしは予め用意しておいた手紙をポストの中に入れておいた。

「わーくんだったら気付いてくれるよね、だってわーくんとは昔から一緒に遊んでたもん」

あたしはわーくんのことを心の底から信じていた。

そして、あたしはわーくんの家に入らず、そのまま帰ることに決めた。

「そういえば、さっき話しかけた黒髪の人……綺麗だったなー」

私は先ほどの黒髪の女性の外見を思い出していた。女の私でさえ羨ましいと思える細さに私が持つていない美しさを有していた。

「もしわーくんがあの人と知り合いだったら、わーくんはあの人に告白しているんだろうなー」

私は「悔しいなー」と呟きながら、家に向かって歩いていった。

間章 『数年前の公園で』 三人称視点

それは数年前の出来事。

山多摩（やまたま）公園と呼ばれる市民の触れ合いの場でもあり子供たちに人気の遊び場に、小学生の男の子と女の子がいた。

男の子は帽子を深く被り、自分の顔を誰にも見せまいと必死になっていた。

女の子は眼鏡を着用しており、男の子の横に並ぶように座っており、長い茶髪の髪が風によって靡いていた。

男の子の名前は雲取亘（くもとりわたる）。顔にコンプレックスがある年頃だ。

女の子の名前は日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）。視力が悪いのが気になる年頃だ。

「……なんでこんな顔に生まれてきちゃったんだろう」

雲取が急に呟いた。

「もつと普通の顔が欲しかった。歩く人の大半が俺の顔を見てる。それが怖くてたまらないよ……」

雲取は肩を震わせながら言った。

「他人は毎日のように『良い顔だね、羨ましい』なんて言っているけどそれは褒め言葉にはならないんだよ。嫌なんだ。そうやって努力していないのに褒められるのは懲り懲りだ」

「……………」

霞はそれを淡々と聞いた。そして静かに見守っていた。

「だから俺は帽子を被っている。こうすれば他人に俺の顔を見せる必要が無い。これがあってやっと俺は落ち着けるんだ」

「嘘だね」

雲取が言い終えると、霞はまるで「私は知ってるぞ」と見抜いているかのように囁いた。

「そんなわけないでしょ？ 貴方は人と話すのが嫌いなだけ。だからいつも一人。一人きりなのよ」

「そ、そんなこと」

「そんなことあるでしょ？ 何かを言い訳にしないと生きていけない人間なんだから。そして自意識過剰にも程がある。少なくとも私は貴方の顔を『良い顔』だなんて思っていない」

雲取の言葉を遮り、霞は淡々と、自分の気持ちを吐き出すように呟いた。

そして霞は自分のポケットの中から眼鏡を取り出し、雲取の手の平に乗つけるように渡した。

「え？ 何コレ？」

「その帽子と交換」

「え！？ ちょ、待って!？」

雲取が帽子を押さえて守るも、霞は無理矢理剥ぎ取ってそのまま帽子を被ってしまった。

「似合う？」

「に、似合うから早く返して……」

「その眼鏡を着けてくれたら考える」

雲取は洪々と「なんなんだよ……？」と呟きながら霞から渡された眼鏡を着用した。不思議なことに、視界は変わらなかった。

「これって伊達眼鏡？」

雲取の質問に、霞はコクンッと首を縦に振った。

「ど、どうして……？」

「コレならちよつと顔を隠すことが出来るんじゃない？」

霞の返答に、雲取は少し半信半疑になっていた。

こんなんで顔を隠せるわけ無いだろ？

雲取は心の中でそう思っていた。

「……本当は貴方の顔が見たかっただけ」

「え？」

「だ、だって中々顔を見せてくれないんだもん。それに私は確かに貴方の顔を『良い顔』だとは思ってないけど、それでも貴方の顔は大好きなんだよ？」

霞は顔を赤らめながらそつぽを向いてしまった。

霞の言葉に、雲取は少し感動した。

「……そつか、お前はこの顔が好きなんだな」

雲取は自分の頬を触りながら呟いた。

「……なあ、この眼鏡貰っていいか？　代わりにその帽子はあげるから」

「え？　め、眼鏡は元々あげるつもりで買ってきたからいいんだけど……この帽子貰っちゃっていいの？　高かったんじゃないの？」

「いいよ、物々交換だ」

雲取がそう言うと、霞は赤かった顔をさらに赤くしていった。

「ありがとう！　“わーくん”！」

霞は満面の笑みを見せながら雲取にお礼の言葉を言った。

これは、数年前の話。

数年前の、とある男の子と女の子の話……。

第4話？ 『再会』 雲取亘視点

赤久奈（あかぐな）さんたちがお見舞いに来てくれた次の日。俺こと雲取亘（くもとりわたる）の体調は万全となっており、学校に通っても問題無さそうだった。

「お兄ちゃん！ 朝だよー！」

俺がゆつくりと布団から抜け出そうとしたとき、俺の妹でもあり三女の雲取二芽（ふため）が騒々しい声を出しながら部屋に乱入してきた。

「……二芽よ、病み上がりの人間にその耳に響く声は止めてくれ。結構辛い」

「んー？ 分かったよお兄ちゃん！」

俺が少し注意するも、二芽はまったく理解してない顔をしながら部屋を出て行った。

嵐のようにとはこのことだろう。

「あ、起きたんだ」

俺が今度こそ布団から抜け出そうとすると、続いて俺の妹でもあり四女の雲取三花（みづか）が静かに部屋に入ってきた。

「体調は大丈夫？ 今日も念のため学校休んでおく？」

「大丈夫、もうピンピンだよ」

俺は妹の心配を払拭するように布団から抜き出ではピンツと背筋

を伸ばし大丈夫だと体でアピールした。

「よかった、お兄ちゃんが元気になって」

三花は「ホッ」と声を漏らしながら胸を撫でていた。

「……心配かけて悪かったよ、看病ありがとな」

俺は三花の頭を撫でてやった。すると三花は見る見るうちに顔を赤らめてしまった。

「お、おい。大丈夫か？　もしかして俺の風邪が移ったのかな？」

俺は急に顔を赤らめてしまった三花に驚いてしまった。一応熱があるかを確かめるため俺のおでこを三花のおでこにくっ付けた。

「ッ！？」

俺がおでこをくっ付けた瞬間、三花はさらに顔を真っ赤にさせてしまった。だけど顔の赤さに反比例しているかのように熱は全く感じなかった。

「おかしいな、一体どうして赤いんだ？」

俺は仕方なくおでこを離して考え始めた。馬鹿なためかまったく理由が思いつかない。

「だ、大丈夫だよ……」

「大丈夫って……そんなに顔を赤らめて何言ってるんだよ」

俺は三花を落ち着かせるために頬を触ってやろうと思い手を伸ばした。だが俺の右腕は三花の平手によりパシッと乾いた音を立てながら弾かれてしまった。

「べ、別に風邪とかじゃないんだから!!」

三花はなぜか叫びながら部屋を物凄い速さで出て行ってしまった。

「………いたいなんなんだ?」

俺は三花のことを考え、そして俺の頭では解決できないということに悟ってしまい、仕方がないので寝巻きを脱ぎ制服に着替えることに決めた。

何日ぶりかの制服は、少し懐かしく思えた。

制服に着替えた俺は階段を降りて台所に向かって歩いていった。

「おはよ、兄さん」

「おう、お早う一枝（かずえ）」

俺は台所のほうで味噌汁を注いでいた俺の妹でもあり次女の雲取一枝に挨拶されたため、丁寧に戻事をしておいた。

「四葉（よつば）姉さんは?」

「先に出かけたよ。今日も遅くなるって」

「そっか、分かったよ」

俺は一枝とちょっとだけ会話をし、近くにあった椅子に座った。

「ああ、兄さん。後もう少しで朝ごはんの準備が終わるから二芽と三花を呼んでくれない？」

「ええ、俺今座ったばっかなんだけど……」

「どうせ暇でしょ？ 私は暇じゃないから」

俺は渋々と「分かったよ」と返事をしてから椅子を立ち上がり二芽と三花を呼びに行った。背後で一枝が「まるで新婚さんみたいだなー」と少し怖いことを呟いていた気がするが、気のせいだろう。というより気のせいであって欲しい。

「二階にいるのか？」

俺は自分に確認するように言ってから階段を上っていった。

「おーい、二芽に三花。朝ごはんが出来るってよー」

階段の途中で俺が上の階に向かって叫ぶと、「はい！」という二芽の元気な声と「すぐに行くー」という三花の声が聞こえてきた。

「さて、俺もそろそろ台所に戻る」

「お兄ちゃん！！」

「グハアアッ！？」

俺が上の階に対して背を向けた瞬間、ドンッ！と重々しい音と共に背後から“何か”がぶつかって来る感触が起きた。背後にぶつかった“何か”は俺の背筋を見事にクリーンヒットしてきて俺は「グハアア」等と言う情けない声を漏らしてしまった。

そして俺の体は背後の“何か”によって階段から足を離され、そのまま顔面から床に叩きつけられた。後もう一段か二段ぐらい上っ

ていた状態で叩きつけられたら大怪我だっただろう。

「いやー、朝からスキンシップをしてしまったよー！」

俺の背後から二芽の声が聞こえてきた。どうやら背後にぶつかった“何か”の正体は二芽だったらしい。

……俺は自分の妹のスキンシップのせいで後もう少して亡き者になるところだったのか、ちょっと悲しいなそれ……。

第4話? 『再会』 雲取巨視点(後書き)

雲取家は長女が四葉、次女が一枝、三女が二芽、四女が三花です。
間違ってます。「なんで『四』が長女なの?」と思うかも知れませんが、多分次ぎ辺りでその辺をしっかりと書こうと思います。

第4話? 『再会』 雲取亘視点

「二芽（ふため）。早くしないと学校の時間になるでしょ？」
「はい！」

一花（かずえ）に呼ばれたことにより二芽は元気よく台所に向かって行った。俺を置いていつて。

「……お兄ちゃん大丈夫？」

三花（みつか）が階段を降りながら心配そうに声をかけてくれた。だが声をかけただけでそのまま二芽に続くように台所に向かってしまった。

「……なんて不憫な子なんだ俺って」

俺はそう呟いてから、そして台所に向かっていった。

「いただきます」

「いただきますーす！」

「いただきます」

「……いただきます」

順に一花、二芽、三花、俺と朝食を食べる礼儀として挨拶をした。そして各々が自分の箸を取ってご飯を食べ始めた。

今日の朝食は米に味噌汁に卵焼きとベーコンだ。卵焼きとベーコンは焼き加減が良いのかとても美味しそうに見える。

「一杯食べてね兄さん」
「おお」

一枝が突然話しかけてきたので、俺はベーコンを口に含みながら適当に返事をしておいた。

雲取一枝。雲取家の次女で高校一年生。俺の一つ年下だ。明るいつ茶髪の髪が印象的で、結構明るい性格の持ち主だ。

「兄さん元気ないけどどうかしたの？」

「ああ、今さっき二芽に背中を蹴られてな。まだ痛むんだ……」

一枝が心配そうに俺の顔を見ってくるので、俺は背中を擦りながら返事をした。

「えー！？ 私そんなことしてないよー！？」

二芽は先ほどの出来事を覚えていないのか、困惑した顔をしながら叫んできた。

雲取二芽。雲取家の三女で中学二年生。元気一杯の女の子だ。少し明るい黒髪をツインテールに縛っており、運動が得意な元気っ子だ。

「いや、お前さっき階段で俺を蹴ったじゃねえか……」

「だから私がお兄ちゃんにそんなことするはずないじゃん！」

二芽は本当に覚えていないのか、少し苛立った声で叫んだ。

……苛立ちたいのはこっちのほうだよ。

「まあ二芽お姉ちゃん少し忘れやすい性格だからね、その辺は仕方ないんじゃないかな？」

今まで我関せずを決め付けていた三花が突然会話に混ざってきた。雲取三花。雲取家の四女で小学5年生。雲取家の中では末っ子だ。日本人特有の黒髪でポニーテールに縛っている。基本的に無口で大人しい子だ。

「ま、確かに過ぎたことはどうでもいいけどな」

俺は三花に同意するように適当に返事をしておいた。

「そういえば四葉（よつば）姉さんは先に出かけたんだよな。最近一緒に朝ごはんを食う機会がなくなってるよな」

「仕方がないんじゃないかな？ お姉ちゃんって職場では結構期待されているらしいし」

俺が四葉姉さんのことを話題にすると、一枝はなぜか少しムツと顔をしかめたが、それでもちゃんと返事をしてくれた。

雲取四葉。雲取家の長女で社会人。俺と違ってかなり出来る人間だ。

外見も美しいし何をやらせても完璧にこなす、ある意味自慢の姉だ。

これは父さんから聞いた話なのだが、父さんは姉さんが生まれたときには「この子には四葉のクローバーのように幸せになつて欲しい」という意味を込めて「四葉」っていう名前を授けたらしい。ちなみに俺のときは「あ、あー……別に適当で言いか」と軽いノリで「亘（わたる）」と名付けたいらしい。その後母さんにこっそり聞いてしまったのだがなんか男の子を生む予定は考えていなかったらしい。無計画すぎる。

その後、妹が出来ることを知らずに長女に「四」の名を授けてしまった父さんは、一枝が生まれたときには真剣に悩んだらしい。そ

して考えた結果、「もう適当でいいや」と投げやりになって適当に数字を当てはめて名前を付けたいらしい。

こういう理由で、次女なのに「一」の名が付いていたりするわけだ。

「そういえば今朝の朝食は美味いな。一枝が作ったんだろ？」
「そうだよ」

俺が質問すると、一枝は少し顔を赤らめながら返事をしてくれた。

「やっぱり一枝のご飯は美味しいな」
「本当？」

「ああ、美味いぞ」

「昨日のご飯は？」

「美味しかった」

「明日のご飯は？」

「美味しそうだ」

「結婚する？」

「それは美味し

しねえよ!？」

一枝が急に「結婚する？」だなんて変な質問をしてきたので俺は大きな声で突っ込みを入れてしまった。後もう少して俺は今の返事に「それは美味しそうだ」と言ってしまうところだった。なんだよ「結婚する？」の返事に「それは美味しそうだ」って……相槌が話題に掠ってねえよ。そもそも結婚とかいきなりぶっ飛んだことを言う一枝も変だけどさあ……。

第4話? 『再会』 雲取亘視点

「一枝（かずえ）お姉ちゃん！ 結婚するとか変なこと言わないでよ！」

三花（みつか）が一枝に向かって怒鳴ってくれた。
そうだ、言ってくれ三花。「兄妹で結婚できるわけ無いでしょ？」
とか言ってくれ。

「お兄ちゃんと結婚するのは私だよ！！」

な、なんだってー！？

俺は三花の発言に驚いて箸で搦んでいた味噌汁の具を床に落としてしまった。

あの冷静な妹までもが『結婚』とか突拍子も無いことを言ったもんだから俺は平常心を保つだけでも精一杯だ。

「えー？ お兄ちゃんは私と結婚するんじゃないのー？」

会話に割り込む形で二芽（ふため）も突拍子も無いことを発言した。

そして俺はとうとう平常心を保てなくなり左手で搦んでいたご飯の茶碗を床に落としてしまった。幸いにも床にはカーペットを敷いていたため茶碗が割れることは無かった。

「二人とも落ち着きなよ。三花と二芽は兄さんと結婚できないわだって二人が兄さんと結婚したら兄さんには『ロリコン』という不名誉なレッテルを貼られることになるんだもん」

「一枝と結婚しても『シスコン』という不名誉なレッテルを貼られるよ。」

「それに兄さんは私のような巨乳が大好きだもん、ねー兄さん」

「一枝はわざとらしく両腕を組んで胸を強調してきた。」

確かに一枝の胸は居乳とまではいかなくとも普通の女子高生に比べたら大きいほうだ。兄の俺でさえ触ってみたくなくなるぐらいいや何を考えているんだ俺は平常心平常心……。

「兄さんだったら触ってもいいんだよ？」

「一枝は上目遣いでこちらを見ながらさらに胸を強調させてきた。」

「い、いや……別に触りたくねえし」

だがそこはやっぱり血の通った家族。間違っても過ちを犯してはいけない。

「そ、そんな！？ 兄さんは私のことが嫌いになったの！？」

「い、いや嫌いじゃないぞ！？ むしろ大好きだ！！」

「一枝が急に泣き始めてしまったのでとりあえず慰めた。」

「ほ、本当に大好き？」

「ああ、大好きだ」

「愛してる？」

「あ、愛してる愛してる」

「結婚する？」

「結婚す しねえよ危ないなっ！？」

後もう少しで取り返しのつかないことを言ってしまうところだった。まあ結婚は冗談なんだからさ。

「お兄ちゃん！ 二眼のことは愛してるー？」

「おお、愛してる愛してる」

「うん！ それじゃ結婚してくれる？」

「だからしないって言ってるだろ！？」

「二芽もいきなり変なことを言ってきた。とりあえず叱っておいた。

「……お兄ちゃん？」

「ん？ なんだ三花？」

「……お姉ちゃんたちと結婚しないんだったら私と結婚してくれる？」

「だからしねえって言ってるだろうがあああああああああ
！！」

俺の怒鳴りは、まるで山彦のように響いた。

その後、近所の榎ノ木（かやのき）さんから「うるさいです静かにしてください」と怒られてしまった。

一応言っておくが、俺はまだ警察のお世話にはなりたくない。

「それじゃ行ってきたーす！」

「行ってくるね一枝姉さん、お兄ちゃん」

朝食を食べ終えて数分後、二芽と三花は玄関で行ってきますの挨拶をした。

「おお、行つてらっしゃい」

「気をつけてね」

俺と一枝も二人に返事をする。そして二人は玄関の扉を開けて小学校に向かつていった。

二芽が通っている中学校の名前は西山（にしやま）中学校。三花が通っている小学校の名前は里古（さとふる）小学校。どちらも家から歩いて20分ぐらいかかる。ちなみに俺が通っている山多摩（やまたま）高校は歩いて10分もしないのでどうしても登校時間に差が出てしまう。

「あれ？　そういえば兄さん珍しいね。普段ならとつくの昔に学校に登校して先生に質問しているんじゃないかな？」

「ああ、うん。榎ノ木さんに説教されていたら間に合わなくなつたよ」

俺は遠い目をしながら一枝の質問に答えた。榎ノ木さんの家はおばあちゃん一人で生活しているらしい。人の悪口はあまり言うものではないが正直に言う結構説教が長い。今日も30分ぐらい説教されてしまった。まあ前回は1時間だったので良くなったほうだろう。

「あ、それじゃ今日は一緒に登校できる？」

「そうだな、久しぶりに一緒に登校するか」

俺がそう返事をする、一枝はなぜか顔をボツと赤らめてしまった。

「やたー！　兄さんと久しぶりに登校できるよー！」

一枝は嬉しそうに顔をニヤけさせていた。正直のことを言っ
てしまつとちよつとキモい。

第4話? 『再会』 雲取巨視点(後書き)

二芽が通っている中学校の名前を書いていなかったたのでその辺付け加えました

第4話? 『再会』 雲取亘視点

「それじゃ、ちょっと準備をしてくるね」

一枝（かずえ）はそう言いながら洗面所に向かって小走りした。
一枝の姿を少しだけ見送って、登校まではもうしばらく時間があ
りそうだったので俺は近くに置いてあった新聞紙のテレビ欄を確認
することに決めた。

「……………ん？」

新聞に手を伸ばそうとしたが、新聞の上に乗っかっていた封筒が
気になってそちらを掴んでしまった。

「おーい一枝!? この手紙なにー!?」

俺は封筒を見ながら一枝に質問した。

「あー、それ兄さん宛みたいだよ」

一枝はわざわざ洗面所から俺のところに来てくれたのか、
いつの間にか一枝は俺の横に立っていた。

「ほら、裏を見てみて」

一枝が封筒のほうを指差してきたので、俺は言われたとおり封筒
の裏を確認してみた。確かに『雲取亘（くもとりわたる）様へ』と
書かれてあった。

「差出人は……書いてないか」

俺は一通り封筒の外見を見渡し、これ以上情報がないと確信したため封筒を開けてみた。

封筒の中には紙があった。その紙には丸っこい女の子らしい文字が書かれてあった。

「……………」

俺は口を閉じて手紙を読み始めた。一枝も手紙のことが気になるのか、俺の肩に顔を乗せ一緒になって手紙を読み始めた。

お久しぶりです。

突然の手紙に驚いていると思いますが、その辺はご了承ください。あたしは貴方のことを忘れたことはありません。

貴方もあたしのことを覚えていてくれると嬉しいです。

あたしのことを覚えていたら山多摩（やまたま）公園に来てください。

覚えていない、または興味が無かったら来なくてもいいです。

あたしは今日の午前9時まで待っています。

来てくれたら嬉しいです。

大好きな“わーくん”へ

手紙にはこう書かれてあった。

「……………なにこれ？」

一枝は呆然とそんなことを呟いていた。

「怪しいにも程があるよ。兄さん、そんな手紙早く捨てちゃいなよ」

一枝は少し気味悪そうな顔をしながら俺に手紙を捨てるよう勧めた。

だけど、俺はこの手紙を捨てることが出来なかった。

多分、最後まで読んでいなかったら、俺も一枝の言うとおり手紙を捨てていただろう。

だが、この手紙の最後に書かれてあった“わーくん”が目映った瞬間、俺はこの手紙を捨てる事が出来なくなった。

俺の知る限りでは、俺のことを“わーくん”と呼ぶのは世界で“アイツ”しかないからだ。

「……………？ 兄さん？ どうかしたの？」

一枝は俺の様子がおかしいことに気付いたのか、心配そうに声をかけてくれた。

「悪い、今日の俺は公園で幼少期に戻りたい気分なんだ」

俺が一枝にそう伝え、一枝は「へ？」と間抜けな声を漏らしていた。

「要約すると、ちょっと行ってきます」

俺は一枝にそう伝え、すぐに玄関に向かい外に出かける準備をし

た。一校も俺が言いたいことをようやく察したのか、「ちょ、兄さん!？」と俺を止めるかのように叫び始めた。

「兄さん!？ 学校はどうするの!？」

「今日は創立記念日だ」

「創立記念日はまだ先だよ!？」

俺は一校の声を無視して、玄関の扉を勢いよく開けて走り始めた。

「はあっはあっはあ……………」

俺は全速力で走り、山多摩公園に来ていた。病み上がりというのもあつてかなり吐きそうな気分だった。

「おえ………… 水水」

俺は乾いた体を潤わせるために水道に向かい蛇口を捻る。喉が力ラカラな俺には水道水というあまり美味しくない液体でもとても輝いて見えた。

「ふう、復活したぜ」

「そっか、それは良かったよ」

俺が水を飲み終え蛇口を閉めると、背後から突然声が聞こえてきた。

「せつかくの再会なのに吐かれたら困るからね、そんな最悪なドラマは打ち切り決定だよ」

俺の背後にいる人物は何がおかしいのか笑いながら言っているようだ。俺は背後にいる人物を確認するために後ろを振り向いた。そこには、背中まで伸びた金髪に、頭をすっぽりと覆ってしまうぐらいの大きさを誇る帽子を被った、まるでアイドルのような女性が立っていた。

「……………随分と変わったな」

俺は女性にそう言った。その言葉を言われた女性は少し寂しそうに、けれども話しかけられたことに喜んでいた。

「……来てくれないと思ってたよ、“わーくん”」

「来るに決まってるだろ？ 数年前の俺はお前に救われたんだからよ」

俺は、数年前に、懐かしい友達に、初めて好きになった女の子に会ったかのように、目の前にいる女性に対して挨拶をした。

「久しぶり、霞」

俺がそう言うと、目の前にいる女性……日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）は、今度は寂しさを含ませずに、満面な笑みで喜んでいて。

第4話？ 『再会』 雲取亘視点

日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）。幼少時代からの付き合いで世間一般で言う俺の幼馴染という奴だ。

最後に会ったときは髪の色が茶髪だったため今の金髪には驚いたが、おそらく“ある仕事”のために染めてしまったのだろう。

中学生の途中から“ある仕事”の都合上、都心のほうに引っ越したためもう二度と出会うことは無いと思っていたけど今こうして俺の目の前にいた。

「どうしてここにいるんだ？ というよりここにいていいのか？」

だから俺は霞に対して質問した。本来、霞はこの場所にいるべき人間ではない。

「んーとね、仕事がある程度片付いたから暇が出来たんだよ。勿論、長居は出来ないけどね」

霞はまるで俺が質問するのを知っていたかのようにスラスラと答えた。

「それにね、最近仕事のほうも慣れたからもしかしたらまたこっちに戻ってこれるかもしれないんだー」

「へえ、そうなんだ」

俺は霞の言ったことに適当に答えはしたものの、少しだけ喜んでいた。

「立ち話もなんだしさ、そのベンチで座りながら話そうよ」

霞はすぐ近くに設けられていたベンチを指差し、そう言った。

「……そうだな、俺も少し話したいことがあるしな」

俺も霞の要望を了承し、二人でベンチに向かっていった。

俺は霞をベンチに座らせ、近くに設けられている自動販売機でジュースを買っていた。

「えっと……確か霞ってコーラ駄目だったよな……」

俺は霞の嫌いなものを思い出し、そしてグレープジュースを二つ買った。

ジュースを取り出し小銭を取ろうとした瞬間、太ももから愉快的な音と共に振動を感じた。

「メール……一体誰だこんな時間帯に」

俺は右手を空けてポケットの中から携帯電話を取り出しメールを確認した。差出人には『赤久奈（あかぐな）』と表記されていた。

「赤久奈さんがメールをするだなんて珍しいな、一体何の用だろう?」

俺は疑問に思いながらメールの内容を読んでみた。

『今日も学校に来てないみたいだけどまだ調子悪いの? 心配で

す（＜―＞）』

メールにはそう書かれてあった。

このメールによって、今現在俺は学校をズル休みしている身だということ进行い出してしまった。

俺は少し慌てながらも赤久奈さんに返信をした。

『うん、ちよつと熱っぽい。だけど心配しなくても平気』

「これで平気かな？ 送信つと」

俺は送信ボタンを押してすぐに携帯電話を閉じて小銭を取り出した。

そして小走りをしてベンチに座っている霞のところに向かっていた。

「ほら、お前確かグレープジュース好きだろ？」

「うん、覚えていてくれたんだ。ありがとう」

霞はペコリツと礼儀よく頭を下げしてからジュースを受け取ってくれた。

プルタブを使いジュースを開けると、少しシュワツと泡がはじける音が聞こえた。だけど俺と霞はあまり気にせずジュースを飲んだ。

「はー……やっぱグレープジュースは美味しいね」

霞は溜息を吐きながら呟いた。

俺がコーラのほうが好きだということは黙っておこう。

「なあ、霞……最近仕事は」

「わーくん、あのジャングルジム覚えてる？」

俺が仕事について聞こうとした瞬間、霞は俺の言葉を遮るように目の前にあるジャングルジムの指差しながら言った。

「あ、ああ……覚えてるよ。よく皆で遊んでたよな」

俺はとりあえず相槌をしておいた。

「うん、私はスカート穿いてたから上のほうには登ってないんだよねー」

霞はそう呟きながらジャングルジムの天辺を見つめている。

俺は昔、霞と他の友人たちと一緒にジャングルジムで遊んでいた頃を思い出した。他の皆はジャングルジムの優雅に登っていたが、俺は目立ちたくないからという理由で、霞はスカートのためパンツが見えるという理由で、それぞれ理由は違えどジャングルジムの天辺に登ったことがなかった。

「ね、せっかくだから登ってみようよ」

霞は目を輝かせながらジャングルジムの天辺を指差した。

「……いや、さすがにこの歳でジャングルジムに登るのは恥ずかしいんだけど」

「大丈夫、誰も見てないよ」

確かに、霞の言うとおり今現在公園内には人の姿どころか気配すら感じられなかった。もしかしなくてもこの公園内には俺たちしかないのかもしれない。

「いや、人目とか関係なく恥ずかしいんだけど……」

「わーくんだったらそんなこと言っちゃって！。大人になったら登れないんだよ？ 登れるチャンスは今しかない！」

霞は親指を立てながら叫んだ。

……それでも確かに霞の言うとおり、今ここで無駄な意地を張ってジャングルジムを登んなかったらいつか大人になったときに後悔するかもしれないな。いや、今の俺たちは充分大人だと思うけどさ。それでも何かの記念として登っておくのも悪くないかもしれない。

第4話? 『再会』 雲取亘視点

「そうだな、せっかくだから登っておくか」

俺がそう返事をする、霞（かすみ）は嬉しそうに笑いながら俺の右手をギュツと握ってきた。

「よし、そんじゃ行こ！」

「あ、おい。ちよつと落ち着けよ」

霞は俺の体を無理矢理引っ張ってジャングルジムへと向かっていった。

子供頃は高く、頂点から落ちたら死んでしまうかもしれないと考えながらジャングルジムを見ていた。だけど不思議なことに、高校生の俺にとってはちよつと大きいぐらいの遊具にしか見えなかった。実際にジャングルジムの大きさは俺の背よりちよつと高いぐらいで「なんでこんなものが子供の頃には高く見えたのだろうか？」と錯覚を覚えるぐらいだ。

「そう思えるほどに成長したってことかな？」

俺はボソツと呟いた。

今俺と霞はジャングルジムの頂点に登って座っていた。ジャングルジムそのものが高くないため、難なく登りきることができた。

「風が気持ちいいね」

「そうだな」

霞の呟きに、俺は適当に相槌をしておいた。

確かに、少し高い場所に登っただけにも関わらず透き通ってくる風は気持ち良かった。子供の頃にこの風を体験していたらどう感じていただろうか？

「……………ねえ、わーくん」

「なんだ？」

「突然なんだけどさ、他の皆はどうしてる？」

霞は青い空を見上げながら俺に質問してきた。おそらく『他の皆』というのは俺たちが中学生の頃に知り合った友人のことを示しているのだろう。

「刈寄（かりよせ）は俺が通っている高校よりも良い所に行ったよ。元々頭が良かったから。市道（いちみち）さんと今熊（いまくま）くんはちよつと遠い高校に行った。他の奴らも適当な高校に行ってるけど臼杵（うすき）は……知つての通りだ」

「そっか。わーくんはどこに行ってるの？」

「山多摩（やまたま）高校。平凡な公立高校ですよ」

「そっか、そんじゃあたしもそこに転校しようかな？」

「マジかよ」

俺が露骨に嫌そうな顔を見ると、霞は「マジです」と悪巧みしている子供のような無邪気な表情をしながら返事をしてきた。

「ねえ。山多摩高校にはどんな人がいるの？」

霞はどうやら俺が通っている山多摩高校のことが気になる年頃ら

しい。

「そうだな……ハッキリ言って普通の高校だ。世の中のどこにもある平凡な高校で、漫画のような面白いこともなければ小説のように感動する場面なんてひとつもない」

「今からその高校に通う人の前でそんな夢の無いことを言わないでよ」

「お前が質問してきたんだろ？」

「そうだけどさー……」

俺が意地悪そうに言うと、霞は「むむー」とホッペを膨らませながらそっぽを向いてしまった。

「んじやさ、友達出来た？」

ただソッポを向いていた時間は短く、すぐに機嫌を直して別の質問をしてきた。

「出来たよ。本仁田（ほにた）くん、川苔（かわのり）くん、月夜見（つくよみ）さん。それと」

「ところでさ、わーくんの知り合いに綺麗で長い黒髪を持った女性の人っている？」

霞はまたもや俺の言葉を遮って質問してきた。こととき俺は「質問に質問を重ねるな」と突っ込むべきか、それとも「人の話は最後まで聞こうぜ」と叱っておくべきか迷ったが、霞が言った『綺麗で長い黒髪の女性』のことで頭が一杯になってしまったためとりあえず叱るのは後回しにした。

「綺麗で長い黒髪の女性……？ あ、俺の中では赤久奈（あかくぐ

な)さんって人がその特徴に当てはまるよ」

「ふうん、赤久奈って言うんだ……」

霞は肘を付いて手の甲を顎に当て、少し考え始めていた。

「……わーくんってもしかしたらその人のことが好きなんじゃないかな？」

そして霞は何の前触れも無くそう言っていた。

「……なんだよ急に？」

「いいから答えて。好きなの？」

俺はいつもの冗談かと思いつつ笑いながら霞のことを見たが、霞はこれまでに見たことが無いぐらいに真剣な目だった。霞とは古い付き合いだがそんな真面目な目で見られる日が来るとは思ってもしなかった。それぐらいに霞は真剣だった。

「……さあ、俺はそういう恋愛感情には乏しいから分からないや」

だから俺は自分の気持ちを正直に伝えた。

「じゃあ、あたしのことは好き？」

「ああ、勿論好きだよ」

俺は再び自分の気持ちを正直に告げた。

第4話? 『再会』 雲取亘視点

「霞（かすみ）のことは幼馴染として大好きだよ。この気持ちには嘘偽りは無い」

「でも幼馴染として好きなだけで、別に恋人にしたいほど好きなわけじゃないでしょ?」

「ああ、そうだな。お前のことは姉妹のようなものだからな。さらに言うと肉親みたいなものだな。さすがに肉親を恋人にしたいと思うほど俺は変態じゃない」

「……………そっか」

俺が笑いながら言うと、霞はなぜか悲しそうな表情をしてきた。

「というかお前、どうして赤久奈（あかぐな）さんのことを知ってたんだ? 知り合い?」

「いや、この間わーくんの家の近くですれ違っただけ。多分その赤久奈さんって人は私のことを知らないと思う」

世界は狭いと言う人がいるけど、まさかここまで狭いとは思わなかった。

「そうだ、俺は好きな人言っただからお前も好きな奴がいるんだろ?」

「……………まあ、好きな人ならいるわよ」

「だったら言ってみろよ。俺だけ言ってお前だけ言わないのは不公平だ」

俺はわざと嫌な顔をしながら霞に近づいた。すると霞は当然のことながら俺から距離を離れた。ジャングルジムという不安定な場所

に乗っているにも関わらず器用なことをするなと思った。

「多分だけ言ったらわーくんのことを苦しめると思うよ」

「ん？ もしかしてその好きな奴と付き合ってたりののか？」

「ううん、ちなみにあたしはまだ男女交際の経験は無いわよ」

霞は横に顔を振った。その瞬間、金髪に染められた髪が靡いて「あ、綺麗だな」と一瞬見惚れてしまった。

「というかお前みたいな綺麗な顔立ちでも彼氏が出来ないんだな」
「世の中甘くないわよ」

霞の答えに、俺は「それもそうか」と返事をしてから話を戻した。

「サツサとゲロっちまえよ。いいじゃねえか。別に減るもんじゃねえよ」

「……………本当に苦しまない？」

「そもそもどうして話を聞くだけで苦しmanaきやいけないんだ？」

「じゃあ言うよ……………」

霞は「すう」と息を吸って、心を落ち着かせていた。

そして顔を紅潮させてから、少し恥ずかしそうに言葉を言い放った。

「わ、わーくんのことが好きなんだよ」

「……………え？」

俺は霞の言葉を聞いて、俺は間抜けな声を出してしまった。霞の顔はこれまでにないぐらいに赤くなっており、恥ずかしさのあまりか顔を背けていた。

霞の言葉は、まるで世間話をしているかのように簡潔で、それ以上ないぐらいに完結していた。たった数文字の言葉に、俺の体全体はドツシリと何か重たいものを背負ったかのようにダルく感じた。喉の奥もまるで栓が詰められたかのように窮屈な気持ちとなり、息をすることさえ忘れていた。

「……………嘘だろ？」

俺はたった四文字の言葉を言った。これだけでも俺は精一杯、俺の体に残っている力を振り絞って出した言葉だ。『言葉の重み』とは良く言ったもので、霞の『わーくんのことが好きなんだよ』という台詞はそれほどに俺の体全体に重みをかけていた。

「さあ、もしかして嘘かもしれないよ」

霞は少し小悪魔っぽい雰囲気醸し出しながら意地悪そうに返事をしてきた。

「あたしも結局はわーくんと一緒に恋愛感情を知らない子供だからね、もしかしたらあたし自身がこの気持ちを勘違いしているだけかもしれないし、そうじゃないかもしれない。そんなことは本人であるあたしでさえ分からないんだから誰にも分からないよ」

でもね、と霞は少し息を吸い、言い続けた。

「わーくんが好きだという気持ちは本当だよ。その気持ちはもしかしたら友愛かもしれないし恋愛かもしれない。でも好きだっていう気持ちは変わらない。だから勇気を振り絞って告白してみた」

「で、その感想は？」

「まだ分かりませーん」

霞は星のマークが見えるんじゃないかと錯覚させるほど綺麗なウインクをした。何とも可愛らしかった。

「……………ようするにこの手紙はラブレターってわけね」
「そういうこと」

俺は今朝見つけた手紙をポケットの中から取り出した。適当に入っていたためか少し折れ目が付いている。

「だから、ハッキリ決めてよ」

霞は突然、真剣な眼差しを俺に向けてきた。

「わーくんが誰を好きになろうとそれはわーくんの自由。だけどその好きになる対象がもしかしたらあたしになるかもしれない。だからわーくんがあたしのことを好きなのか、それともその赤久奈さんって人のことを好きなのかハッキリ決めて」

霞は何の躊躇いもなく言い連ねてきた。

……………幼馴染と久しぶりに会ったはずなのに、なぜか大変なことになってきたぞ。

「……………別に今じゃなくてもいいわ。だけど三日後までには決めて。こっちはこっちの事情があるから」

「……………分かった。いや、本当は突然すぎて何も分からないんだけど……………とりあえず三日後までには白黒つけるよ」

「うん、それがいいと思うよ。ちなみにあたしはいつでも良いわよ」

霞はそう言いながら、ジャングルジムから跳んで地面に着地した。

「そうだ、わーくん。その眼鏡まだ着けてたんだ」

「え？ ああ、まあな。お前もその帽子ちゃんと被ってたんだな。似合ってるぞ」

「ありがと、わーくんの眼鏡も似合ってたてカッコイイよ」

霞はそう言い残して、まるで逃げ去るかのように公園を出て行った。

「……なんだか頭の悪い俺にとってとんでもないことになってきたなあ」

俺は青い空を見上げながら、誰もいない公園で一人呟いた。

霞の告白は、確実に、真正面に俺の心を苦しめる原因となっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8457x/>

彼女と恋と勉強方法

2011年11月24日23時03分発行